
Fate**なんとなく書いてみた**

闇のロマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e なんとなく書いてみた

【Nコード】

N 1 9 0 0 X

【作者名】

闇のロマン

【あらすじ】

F a t e の性転換祭りハーレムとかあんな見ないな、とか思ったのでちと書いてみた。

適当にやっていこうと思います。

シリアスあんま得意じゃないんで基本色のない話になるかと思いますがよろしくおねがいします。

最近小説読んで気づいたんですが、「」の会話文などの文章の締めって「。」「いらなんだーって知りまして、全体を修正しました。内容は変更していませんのでご安心？ください。

ぶろろーぐ(前書き)

どうも闇のロマンです。

マイペースにやってくんでよろしく願いますだー。

ぶろろーぐ

俺の朝は、義妹を起こすことから始まる。

冒頭から突然すまない、どうもはじめまして。

俺の名は衛宮 サガル 退。

衛宮家の長男であり、なんと・・・。

まあ別になんもない。

ただ一つ言うことがあるとすれば可愛い義理の妹がいるという事ぐらいか。

妹の名前は衛宮 シロ 白という。

白は本当に優しい娘で、自分より他人を大切にしすぎちゃうぶっちゃけ、ちよつとどうかしてる娘だ。

何度も自分を大事にしろといっているのにアイツはまったく。

自らの妹を思い返して、俺は嘆息する。

おそらく白がああいう性格になったのは、ひとえに親父、衛宮切嗣にあるだろう。

俺は当時を思い出すため、記憶を掘り返す。

10年前、俺と白――まだ知り合っていない――は冬木市で起こった原因不明の大災害に巻き込まれた。
まるで地獄だった。

見渡せば視界は全て赤に染まっていた。
炎が揺らめき、血がそこらじゅうに撒き散らされているという、ガキには耐えられない凄惨な光景。
だが俺は気にも留めなかった。

死にたくない。

その一心だった。

あれほどの災害に見舞われながらも、どうにか繋ぎとめた命。

そう易々と失ってたまるか、と。

必死で地面を這っていた。

這う

這う

這う

地面に散乱するガラスが腕に刺さる。

腹に刺さる。

足に刺さる。

痛みはなかった。

痛みを感じるほどの感覚なんてもうなかったから。

ただただ、俺は生きるために這った。

雨が降り始めた。

体力が奪われる。

寒い

寒い

寒い

なんでこうなった。

自分の運命を呪わずにはいられなかった。

なんで俺がこんな目に。

そう思わずにはいられなかった。

しかし、闇の中には、確かに光も存在した。

体力の限界で脱力していた俺に、影が差した。

俺は顔を上げた。

そこにいたのは一人の男。

泣いていた。

とても幸せそうに。

どこか、安堵しているようだった。

人に救われたと安心した俺は意識を手放した。

その後目を覚ました俺が最初に目にしたのは白い天井だった。
知らない天井・・・というわけでもない。

病院だろう。

病院ではよく見るであろう光景だ。

病院にしていると認識したと同時に、自分はあの地獄から抜け出せたのだと理解した。
生きたんだ。

そう解り涙が出そうになり、手で顔を覆おうとして気付いた。
利き腕、右腕がなかった。

ああ、代償は小さくはなかった。
それでも生き残れたんだ。
死ぬよりはましだ。

そう自分を納得させていると、一人のコートの男が病室に入ってきた。

一人の少女と共に。

その少女こそが、俺の義妹となる少女――衛宮 白――だった。

結論から言つと、俺と白はコートの男――衛宮切嗣――に引き取られた。

その数年後の出来事、これが所謂白のターニングポイントというやつだろう。

正義の味方になりたかった。

そう切嗣は言った。

そう言った白はこう言った。

諦めたのか、と。

そう問う彼女に、切嗣はこう返した。

正義の味方は期間限定で、もう自分には志せぬモノだと。

ならば、と白。

「あたしが正義の味方になってやるよ。任せとけて、じいさんの夢は、あたしがちゃんと形にしてやつから！」

どこまでも純粋な笑顔で彼女は言った。

何故だろう、俺はその彼女の在り方が酷く歪に感じ、不安を感じた。

いつかその正義感が歪んでしまい、彼女自身を壊してしまわないかと。

守れるだろうか、俺に。

この歪な正義を掲げた肉親を。

・・・とまあ、なんだかんだ回想をしたが実際守ろうなんて考えちゃいない。

白も子供じゃない、自分のケツは自分で拭くだろう。

俺は正直、他人守れる力なんてないし、自分の身すら守れるかどうか疑わしい。

右腕があれば幾らかマシだったんだろうが、無い物ねだりしても仕方がない。

今日も今日とて、自分のペースで俺は行く。

さて、前置きはここまでにしてそろそろ白を起こしに行くでしょう。どうせ今日もあいつは自分のテリトリー（土蔵）で腹出して寝てるんだろう。

俺は起きたばかりで覚醒しない自分に軽く顔を叩いて起こして、土蔵に向かった。

案の定と言つべきか、白は土蔵でツナギのまま寝ていた。

恐らく昨晚遅くまで何かの修理か解体かなんかして夢中になっていたのだろう。

腹は、出ていない。

「起きろ白、また土蔵で寝て・・・女の子なんだから塵程度には慎みを持ちなさい」

「う・・・ん・・・、ああ兄貴、おはよう」

白は少しサイズのブカブカなツナギの袖で眠そうに眼を擦ると、ほにや、っと気の抜けた笑みを浮かべた。

どうやらまだ半分夢の中のように、時折「うにゅ・・・」とか訳わからん言葉を発している。

白は基本朝に弱い、結構な比率で朝ごはんは白が作るのだが、朝に強くはない。

だから俺が朝起こしに来ているのだが、だったら俺が朝作ればいいじゃないと提案したことがあるのだが、『兄貴にご飯を作ってあげたい妹の気持ち少しはわかれ！』、と言われてしまった。

『そんなこと言われても俺は妹キャラではないのでその気持ちは理解できないよマイスターっていうかご飯作ってあげたいってまるで新婚さんみたいだね。はっはっは』

・・・と返したところ本気と書いてマジでぶん殴られた。

照れ隠し・・・と思っておこうと心に決めた。

あれは痛かった。

とりあえず俺はいつまでたっても覚醒しない我が妹を起こすべく、妹の頭頂部に大気をも切り裂かんレベル（嘘）のチヨップをかますのだった。

「とうりゃー」

「あう！」

白は目が覚めて状況を理解したのか頭をさすりながら上目遣いに俺を恨めしげに見た。

俺はそんな妹ににこやかに告げた。

「おはよう」

今日が、始まる。

ぶろろーぐ（後書き）

わけわからんし、ストーリーもへったくれないものになると思いますが、まあ見てやってください。

なんか衛宮さんを朝弱い娘にしてみました。
なぜだろうね

第一話（前書き）

どもです

キヤラ崩壊がひどいです

すみません

ではどうぞ

第一話

白をチョップで起こしたあと、白はすぐに朝飯の準備に取り掛かった。

手伝おうとしたがやんわりと断られてしまったので、俺は居間でテレビの眺めていた。

最近巷で原因不明のガス漏れ事故で騒がれているようだ。

正直な話人事ではない。

原因不明というのも人の不安を駆り立てる。

俺はともかく白はまだ高校生だ。

こんな訳の分からない事件で危険にあって欲しくない。

自分で事件に突っ込むというなら自己責任で止めはしないが。

ちなみに俺は学校で清掃員をやっている。

日々窓ガラス拭いたりトイレ磨いたりしている。

学校の子達には清掃のお兄さんと呼ばれ親しまれている。

たまにタメ口の子がいるが、将来彼らが上司にタメ口使って困らないように日々チョップして思い知らせている。

いい子達ばかりだからすぐに分かってくれるが。

「あにきー、ご飯出来たから運ぶの手伝ってくれ！」

「うい」

そんなこんなでいつの間にか食事の仕度が出来たようだ。

この妹は本当に出来る子だ。

朝にこそ弱いのご飯は美味しい、掃除も出来る、つまり家事は完璧だ。

少し男勝りな口調と性格だが身内びいきせずとも良い娘だし可愛い。
だのに何故この娘の浮いた話を聞かないのだろうか。
お兄ちゃん妹の将来が心配だと、俺は溜息を吐いた。

「じゃあ、先に学校行ってるぞ白」

朝飯を食べたあと、俺は仕事のため学校に向かうべく家を出ようとしていた。

白と違って俺は学生ではないので、白ほどゆっくりは出来ない。

「あ、待ってくれ、あたしも一緒に行く」

「ん？いつも思うがお前はそんなに急ぐことないんだから時間まで家でゆっくりしてればいいのに」

「いいんだ、あたしが兄貴と一緒にいきたいだけなんだから、それに朝練もあるしな」

この妹はなんというか、嬉しいこと言ってくれる。

兄貴冥利に尽きるが、今だ兄離れしない妹の将来がやはりお兄ちゃん心配です。

だが俺も人の事は言えなかったりする。

生まれてこの方彼女なんて出来たことないし。

まあ作るうと思って奮起したことも未だかつてないが。

「じゃあ一緒に行くか」

「うん」

「じゃあ、また家でね。兄貴仕事頑張つてね」

「おうよ、お前も部活に授業頑張れよ」

あれから学校――穂群原学園――に着いた俺たちは校門で別れた。白は弓道部に所属しており、朝練がある。

とはいえ朝練には多少時間が早いが我が妹のことだ。

道場の掃除でもして暇を潰すことだろう。

軽く俺の仕事が取られている気もするが。

基本更衣室、女子トイレの類以外の場所の掃除は俺の管轄だ。

後は、色々と教員の方々のサポート的な事をしている。

プリントを印刷したり、授業で使う少し学生には触らせられないものを運んだりなどだ。

「さて、まずは職員室行くか」

「おはようございます」

職員室に行くと、先生方がまばらに挨拶を返してくれた。

俺はタイムカードを確認した。
刹那。

「おはようございます、退君。」

「うおっ！」

気配すら感じさせず、突然声をかけられ驚きの声を上げてしまった。
気配を感じさせずに挨拶する人なんて俺は一人しか知らない。

「びつくりしましたよ。おはようございます、葛木先生」

「おはようございます。それと退君、私のことは宗香で結構です」

「それはプライベートでなら、ということ・・・」

このレディースのスーツに身を纏ったショートヘアのメガネ美人の先生——葛木 宗香^{そつか}——は俺がこの学校の清掃員として配属された当初から何かと気にしてくれていた人だ。

実にクールで無表情なので感情の起伏がわかりづらいのだが、何かと結構一緒にいることが多かったりするので、なんだかもう彼女の感情の機微が判るようになってしまった。

「それは残念です。それより退君、少しお願いがあるのですが」

「あ、はい。なんででしょう？」

「朝礼で配るプリントが数があるので運ぶのを手伝っていただけますか？」

「わかりました、教室まで運べばよろしいんですね?」

「はい、今運んできますので少しお待ちください」

そう言つて葛木先生は職員室の自分の席から大量のプリントを持ってきた。

なんでこんなにあるんだ。

「凄い量ですね」

「一限目の授業で使うプリントもありますので、そのせいかと」

「なるほど、では確かにお預かりしました。教室まで運んでおきますね」

「あ、あと、退君」

「はい?」

「あの、今日はお昼は何を?」

昼・・・あ、そういえば弁当忘れたな。

仕方ない、購買は混むし、コンビニにでも行くとするか。

「そういえば弁当を忘れてきました、まあでも、コンビニでも調達します」

「いえ、よろしければ一緒にませんか? 実はお弁当を作りすぎてしまったのです」

弁当作りすぎるとか結構おつちよこちよいなんですか？先生。
しかし、これはなんておいしいお誘いだろうか。
この申し出を受けない手はない。

「本当ですか？だったら是非一緒に緒させてください！助かります！」

「・・・！！あ、う・・・」

そういつて俺はすっかり葛木先生の手を取ってしまった。

すると先生はみるみる赤くなってしまい、プシューという音をたてて固まってしまった。

まあしかし、割とあることだし、時間が経てば元にもどる上にその間言われたことはしっかり覚えていたので問題はない。

「楽しみにしていますね、では」

一言言つて俺はプリントを持ってその場を後にした。

第一話（後書き）

実は葛木先生って20代なんですよ。はい、という訳で葛木先生登場です。

普段クールなので突発的な事に弱い（手を握られるような）、という設定にしてみました。

本当に崩壊がひどいですね。すみません。

でもそれでも読んでくださる方がいれば嬉しいな。

第二話（前書き）

すみません、すごく短いです。
眠くて仕方なかったんだ！

第二話

プリントを教室に運んだ後、俺は学校周辺の清掃活動に勤しむことにした。

元々それが本業であるし、怠るわけにはいかない。

「さて、結構雑草が増えてきたな」

俺は作業着の袖を折り、作業に取り掛かる。

雑草は根っこから抜かないとあまり意味がないのでしっかり手作業でやる。

「また朝からそんな雑務やってるわけ？まあ、あなたにはお似合いかしらね」

すると割と聴きなれた声が耳に入る。

振り向くと案の定、彼女——間桐椎名——だった。

青いロングウェーブヘアが風に撫でられるその姿は実に美しい。

だが、彼女の正確はあまりよろしくない。

まず、彼女は実に素直じゃない。

所謂、ツンデレというやつなのだろう。

「相変わらず憎まれ口叩く奴だねお前は」

「ふん、いいじゃない。あなたと私の仲なのだから」

まあ確かに、俺と彼女は割と長い付き合いになる。

彼女の妹——間桐桜——も同様にだ。

そして彼女たち姉妹は白とも仲がいい。

桜は白を慕っているし、椎名は憎まれ口こそ叩くもののまんざらでもなさそうだ。

きつと彼女の素直になれない性格と白のお人好しな性格は、なんだかんだでバランスが取れているのだろう。

「そついやお前、部活はどうした？朝練あるだろう？」

「あなたがまたここでせつせと草むしりでもしているんだろうと思つてね、手伝いに来てあげたの。」

断るなんて言わないでね。せつかくの誠意ある行動なのだから」

相変わらず素直じゃない。

しかし、凄く優しい娘なのだ。

割と面倒見もよく、白と同じ部に所属していて腕も良い。

彼女の美貌も相余って性別問わず人気のある。

今この場にはいないが黒髪のツインテール美少女——遠坂凜——と二人合わせて【穂群原学園美少女の2強】とまで言われているのだとか。

「・・・じゃあお願いしようかな」

「ふふふ、任せて頂戴」

あれから数十分、椎名は授業があるので去っていった。

それから俺は学校を清掃して回り、昼になったので葛木先生との約束のため屋上に向かった。

「お待たせしました先生」

「そこまで待っていませんよ、ではお弁当です、どうぞ」

受け取った弁当はシンプルな黒い弁当箱だ。

中には卵焼きや意外だったがタコさんウィンナーなど、弁当の定番メニューが勢揃いだった。

作りすぎたと言っていたし、手作りなのだろう。
ありがたいことだ。

「では、遠慮なくいただきます」

「どうぞ、召し上がってください」

俺は先生から借りた箸で弁当を食べ始める。
すると先生が話しかけてくる。

「いかがですか？」

「本当に美味しいですよ、この弁当、白に引けを取らないなこれは！」

「ふふ、それはよかったです」

本当に美味しい。

こんなに家庭的な先生だったとは思わなかった。
いつも無表情なのでてっきり食事などにあまり頓着しないタイプだ

と思っていた。

人って見た目に寄らない、それを知ることが出来た今日の昼だった。

こんな平和がいつまでも続く。

そう思っていたのだが、まさかその平穏が崩れ去るのが刻一刻と迫っているとは、俺は思っても見なかった。

そして俺は・・・運命に出会った。

第二話（後書き）

多分そろそろサーヴァント登場だと思います。

第三話（前書き）

結構投稿早くできた気がしね？
俺はする！

第三話

放課後、部活で忙しいであろう白より先に帰宅した俺は夕飯の準備に取り掛かった。

そしてキッチンで肉や野菜の下拵え（したごしらえ）をしていると、家のインターホンがなった。

「あ、もうそんな時間かな？」

俺は手を洗って、玄関へ向かい扉を開けた。

そこには紫色の大人しそうな女の子——間桐桜——がいた。

彼女は白の後輩で同じく弓道部に所属している、今日会った椎名の妹だ。

ただし姉と違って性格はまったく逆といっていい。

しかし優しく、気を使えるという点に置いては間桐姉妹は実に似ている。

「こんばんは桜、今日もわざわざすまないね。白は居残って道場の掃除でもしてるのかい？」

「こんばんはお兄さん、先輩は相変わらずですよ。ふふっ、とても先輩らしいと思いますけど」

そう言って笑う彼女は実に楽しそうだ。

彼女はとても白を慕っており、今朝はいなかったが普段は結構な頻度で我が家の朝飯の準備を手伝ってくれている。因みに理由は定かではない、以前に白が病気で倒れた際に来るようになったのだが・

・もしかやソツチ系の趣味なのだろうか？この娘は・
いやいや、そんなことは・・・あるまいよ。

「じゃあ準備に取り掛かるか、行こうか桜」

「はい、今日もご教授願います、お兄さん」

と、キッチンに赴こうとした刹那。

「たっだいまあああああああああああ！！」

酷い大声で扉が壊れんばかりの力で思い切り扉を開けた音が背後から聞こえた。

溜息をしたあと振り向くと案の定というべきかわかつてはいたが、白の姉貴分がいた。

「今帰ったわよー！ご飯は？」

「まだですよ藤村先生、今から準備に取り掛かるところだったんです」

「というわけだから大河はとっとと居間で冬眠してろ、やかましいから」

「ぶーぶー、そんな言い方ないんじゃない？退は桜ちゃんみたいにもう少し私に優しくしてもいいと 思うわよー。あとタイガーって言うなああああああああああああああああああああああああああー！」

そう目の前で喚いている女性——藤村大河——は穂群原学園の教師をしており、弓道部の顧問をしている。

能天気な見た目に反して割としっかりしており、そこそこに頼れる人間なのだが、普段が能天気すぎて正直頼ろうと思えない少し残念な先生だ。

しかし剣道は段持ちで非常に優れており、また明朗快活な性格で親しみやすいので生徒たちにも人気がある。

タイガーと呼ばれるのを気にしているようだが実際にそう見えるわけ、仕方ない。

「俺が大河に優しくするのは本当にお前が悩んだりしている時だけだろうさ、優しくしなくてもなんら問題ない奴に優しくするなんて必要性ないだろ？」

「お兄さん・・・相変わらず藤村先生にはドライですね・・・」

「でしょ？桜ちゃん、慰めて〜」

言って大河は桜ちゃんに抱きつくこうとした、が。

「すみません先生、夕飯の仕度に取り掛からないといけませんから、行きましようかお兄さん」

「・・・。」

「大河・・・、桜マイペースな娘だから・・・」

「うがあああああああああ！不貞寝してやるうつうつうつうつ！」

寝るのかよと心の中でツツコミを入れた後、俺はキッチンに向かい桜と夕食の準備に取り掛かった。

準備が終わり、白の帰りを待っていたがいつまで経っても白は帰ってこなかった。

それなりにいつものことではあるが、桜と大河は家に帰ってしまった。

俺は仕方なく白を探しに家を出た。

俺は恐らくいる可能性の高い学校にいた。

もしかしたらまだ掃除に夢中になっている可能性も否めない。

俺は弓道場に向かった・・・がしかし、そこには綺麗になった道場の閑散とした空気はなく白はいなかった。

次は校庭に出る。そこで俺は妙な違和感を見つけた。

それは校庭の砂のコンディションだ。普通はわからないだろうが、俺は毎日この校庭にトンボをかけているし、野球部やソフト部の子達も部活の最後にトンボをかけて帰るのだ。

だから、流石にこんなに広範囲を暴れ回ったような不自然な砂の形をしている訳がない。

しかし、その理由は気になるが気にしても詮無きことだし俺には及びもつかないだろう。

俺は考えることを放棄して、学校を後にした。

それから商店街や、新都、公園、柳洞寺など探して回ったが白の姿はなかった。

もしかしたら入れ違いなのかもしれないと、俺は帰路についた。

家には電気がついていた。しかし、なんだろういつもと家の空気が違う気がする。

何故だろう、凄く不安だ。

「ただいま！」

俺が声を出した刹那、なにやら居間でドタバタと物音がした。

俺は不審に思いそつと扉を開けた。

そこには白がいたのだが……。

「お、おかえり兄貴！遅かったな！」

「おかえりなさい退さん、それと夜分遅くに申し訳ございません。お邪魔していますわ」

何故穂群原学園美少女の2強の一角の遠坂さんがここにいるのだ……。

遠坂さんは綺麗な黒髪ツインテールを揺らし、どこか優雅に軽く頭を下げてきた。

まあそれはいい。まだ妥協出来る。しかしだ……。

「白、この際お前が連絡もないのに帰りが遅くて心配で色々走り回

らされたという件については良しと　しろう。無事だったならそれでいい、いいんだがな？・・・そのレインコートの方はどちら様だ？」

「あ、えつと・・・彼女は親父の知り合いで、親父に会いに来てくれたらしいんだが・・・もう亡くなった事を知らなかったらしいんだ。それでえつと、とりあえずセイバー、あたしの兄貴だ。挨拶してくれ」

「白の兄君でしたか、私はセイバーと申します。お見知りおきを」

この出会いが良い意味でも悪い意味でもこれからの人生の大きな転機となるとは、俺はこのとき思ってもみなかった。

日常は非日常へ加速していく。

第三話（後書き）

セイバーでした。
言うてもチヨロつとですがね。
さて・・・寝るか。

第四話（前書き）

俺の更新、何故か加速するの巻

第四話

セイバーさんから自己紹介された俺は自分もあらためて自己紹介し、気になっていた本題に入った。

「それで、遠坂さんはなんでここに？ウチの白と交友関係があったなんて意外だな」

「いや、別にあたし達は「そうなんです。今日は偶然帰りが遅くなりまして、これから家で一人で食事すると言ったら白さんが食事に誘ってくださいまして」・・・え？」

（話し合わせなさい）

（む、すまん・・・兄貴には内緒だったな）

（まったく、お兄さんは魔術を知らないんだから巻き込むわけにいかないでしょう！）

（白はもう少し事の重要性をもっと認識すべきです）

（うつ、ごめん・・・）

なんか二人は突然コソコソと耳打ちし合い始めた。

なんて仲睦まじいのだろう、遠坂さんはてつきり猫でも被っているかと思っていたがどうやら思い違いをしていたようだ。

俺は勘違いしていたことをすまない遠坂さんと心中で謝った。

「ああ、無理に言わなくていいんだ。女の子同士だし女の子同士の

隠し事なんて事もあるだろう。少し寂しい気がしなくもないが、そういう共通の秘密が持てるような友達が白にいるのを知ることが出来たんだからむしろ来てくれてありがたかった。ありがとう遠坂さん」

「へっ？あ、いえ、こちらこそ白さんにはいつもお世話になっていきますので・・・お、おほほほ」

「（なにさ、おほほほって・・・ああ、遠坂突然感謝されて、柄にもなく照れて「何か言ったかしら・・・？」うつん何も）」

本当に仲いいんだな、たびたび内緒話しちゃって。

ここは俺は退散すべきだろう、そう思い俺は腰を上げた。そんな俺の行動を見て白はキョトンとした表情をした。

「あれ？兄貴どっか行くのか？」

「今日はきつとあれだろう？二人で色々内緒話したりしたいだろう？だから俺は退散しようと思ってね。ああ、そうだ、棚にお菓子とかお茶補充してあるから好きにしなよ白」

「あ、ああ、わかった・・・（完璧に友達だと思い込んでるな兄貴・・・）」

「（そうね・・・巻き込まないためではあるけれど何か悪い気がしてきたわ・・・）」

俺はまた内緒話を始めた二人を後目に今を出ようとした。しかしその瞬間偶然目の箸に見えたセイバーさんに俺は言葉を失う羽目となった。

あのレインコートの隙間から見える甲冑っぱいの・・・ナニ？
もしかして・・・コスプレイヤーというやつなんだろうか？

もしかして外国で日本文化を間違って吸収してきてしまった類の方
なんだろうか？

「あのセイバーさん、最後に一ついいかな？」

「はい、なんでしょうか？」

「そのレインコートの隙間から見えるその甲冑っぱいの・・・ナニ
？」

「「「えっ・・・？」「」」

三人が硬直した。もしや触れてはならない話題だったのだろうか。
それともレインコートで隠しきったつもりだったのだろうか？とい
うかそもそも不自然にレインコートが盛り上がっているんだから最
初から気づけよ俺。

「えっと・・・聞いちゃいけない話題だった？ああと・・・コス
プレってやつなのかな？」

「そ、そうコスプレだよ兄貴！セイバーは生粋のコスプレ好きらし
いんだ！」

「そうなんです！騎士甲冑だけでなくメイド服や、ネコミミウエイ
トレスにもなっちゃうくらいのコスプレイヤーらしいんです！」

「はっ！？ちょ・・・シロ！？それにメイガ・・・リン！？」

やはりそうだったか・・・いや何となく想像は付いていたんだよ！
そうか、確かにここまで可愛い娘がメイド服やらなんやらで着飾ればさぞかし素晴らしいことだろう。

俺にそういった物を嗜好とする趣味はないが、セイバーさんだったら良いかもしれない。

学校のアニオタ男性教師の方もネコミミメイドは素晴らしいと語っていたし！

俺はなにやら顔を赤くして俯いて恥ずかしそうにするセイバーさんの前に腰を屈め視線を合わせ、ポンと肩に手を置いた。

「セイバーさん、趣味は人それぞれだよ。だから俺は決してその趣味を批判したりしない・・・。その趣味は色々と壁にぶつかることが多いかもしれないが・・・頑張つて！」

「うう・・・お、お気遣い感謝いたします、兄君・・・」

「退でいいさ、セイバーさん・・・」

「くう・・・」

なにやらセイバーさんが男泣きっぽいことを始めた。

俺はただ黙って抱きしめてあげた、彼女が泣き止むまで・・・。

最優のサーヴァントが、一般人にコスプレイヤーと勘違いされ拳句の果てに慰められた・・・そんな1コマ。

「じゃああたしは遠坂送ってくるよ」

その後、そう言つて白はセイバーさんと遠坂さんを引き連れて家を出た。

俺は女の子だけじゃ危ないだろうと同行を申し出たのだが、セイバ―さんは世界でも有名な剣術家らしく大丈夫だと断られてしまった。少し心配だ。

何もなければいいのだが……。

酷く嫌な予感がする。

何か面倒な事が起こると、俺の第六感は告げている。

そう、俺の感も捨てたものじゃない。

俺がこんなことを考えているのと同時に、彼女たちは大変な目に遭っていたのだから。

「やっちゃんえ、バーサーカー……」

[illegible]

第四話（後書き）

なんか今日は筆が進んだなー
キャラ崩壊がひどかったが

そういえばペルソナ4のアニメがテンポが異様に早かったな・・・
ゲームクリアしてたから主人公が喋ってるのに違和感感じちゃうし、
マジコイのアニメはなんか初回から最終回だし・・・どうなってんだ一体。

第五話（前書き）

シリアスと思うじゃない？
残念、俺には続かない・・・。

第五話

S i d e : 白

なんだ・・・これ？

教会で聖杯戦争の参加を決意し、十年前の火災の真実を知ったあたし——衛宮白——は目の前にいる存在に絶句した。

圧倒的な威圧感、目の前にいる者は危険だと肌で感じる。体どころか意識まで凍ってしまいそうだ。

その存在——女性——は見た目こそ普通だが内包している力は全くと言っていい程に普通じゃなかった。

その女性は前髪で顔が隠れているが、赤く輝く瞳がこちらを見ていることはわかる。

女性を引き連れているのは銀髪の少女、あたしがいつかの学校の帰り道にすれ違った娘だ。

「こんばんはお姉ちゃん、こうして会うのは二度目だね。そしてはじめましてリン。私はイリヤスフィール、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言った方がいいかしら？」

「アインツベルン！？」

少女の名乗りには遠坂は驚いた様子だ。遠坂は知っているのか、この少女のことを。

遠坂の様子を察するに有名な魔術師の家系なんだろう。

だがそんなことより気になるのはイリヤスフィール・・・長いのでイリヤと呼ぶが、イリヤの背後に佇む女性だ。

浅黒い肌に民族衣装のようなものを身にまとっている。

「それに何なのあのサーヴァント、単純な能力ならセイバー以上じゃない・・・なんてデタラメ・・・！！アーチャー、アレと貴方が正面から戦うのはあまりに分が悪すぎるわ。あなた本来の戦い方に専念すべきよ」

そう呟く遠坂、どうやら自分のサーヴァント——アーチャー——に向かつて指示しているようだ。

霊体化していて姿の見えないアーチャーは応答する。

「了解したが、守りはどうする？あれほどの力を内包しているのだ。生半可な守りでは凌げまい」

アーチャーは己の懸念をマスターに尋ねる。

遠坂はそれに苦虫を噛み潰したような表情ではあるが答えた。

「流石に倒すことはできないでしょうけどこっちは三人、凌ぐだけなら何とでもなるわ。いえ、何とかする」

「了解した」

了解したアーチャーはどうやらその場から去ったようであった。すると遠坂は今度はあたしに視線を合わせた。

「衛宮さん、逃げるも戦うも貴方の意志次第よ。・・・けど出来ることなら何とか逃げなさい」

「大丈夫だ、覚悟は・・・出来てる」

「そう・・・ならいいわ、セイバーも準備はいい？」

「はい、シロが決めたことならば・・・私はシロの、マスターの為に全力を尽くすまでです」

あたしは頷いて少女の方へ向き直った。

少女は涼しげな表情を浮かべながら軽い口調で訪ねてきた。

「相談事は終わった？なら、始めちゃっていいかしら？」

あたし達は身構えた。

来るべき戦鬪に備えて。

そして。

「やっちゃえ！バーサーカー！」

.....! !

幕は開く。

Side: 退

「
・
・
・
!
?
」

白達を見送ってからしばらくして、異常なまでに悪寒がした。

今まで感じてきたチャチなレベルじゃない。

死に直結しているんじゃないかと思われるほどの悪寒。

もしかして、白達に何かあったのだろうかと不安が過ぎる。

「・・・行くか」

心配で仕方ない、何かあってから後悔しては遅いのだ。

これが白の理想の為に決めた選択でという前提があるならば俺はあまり関与しないが、不慮の事故となったりするならば話は別だし命に関わるならば尚更だ。

兄として、助けないわけにはいかない。

いや、助けられないとしてもだ。行かなければならない。

妹の為なら俺はどんな傷だって不名誉だって背負う。

俺は衛宮白の兄なんだから。

「さて、その前に・・・あの人から貰ったアレを持っていくか」

万が一、あの人みたいな非現実的な者に襲われたりしてたりしたら、手ぶらじゃ敵わないからな。

辿り着いた其処は戦場だった。

そこかしこが破壊され、何があったんだと思わず誰かに問いたくなるような惨状だ。

だがそこに俺の妹とその友人たちはいた。

しかし、白と遠坂さんは動けもしないようだった。

確かに、と俺は納得せざるをえなかった。

俺は遠くで戦っているセイバーさんと謎の褐色肌の女性を見て、その圧倒的な光景を、彼女らと同じ光景を目の当たりにしているのだから納得するしかない。

俺は一瞬で頭を切り替えた。

ここはどうやら俺の知っている日常とは全くの別物らしい。

どこからか飛来している何か——弓だろうか——が、セイバーさんを援護しているようだがあ的女性はものともしていないようだった。

お互いの剣戟がぶつかり合い火花が散る。

その衝撃は窺い知れるものではない、凡そ一般人に受けきれる一撃ではないだろう。

あれほどの練度を持つセイバーさんもそうだが、あの女性も何者なのだろう。

しかし今はそんなことをゆっくりと考えている暇はない。

何故ならば拮抗していたパワーバランスが徐々に崩れてきたからだ。セイバーさんが押され始めてきたのだ。

俺は即座に飛び出す。

一本しかない腕に一本の刀を携えて。

刹那、セイバーさんが女性の岩を切り抜いたような大剣の一閃を諸に受け止め体勢を崩す。

是非もない。

「駆ける・・・！」

一切の無駄を無くし最速の一步を踏み込む。

これを繰り返し行うのは足への負担が大きいがためらっている暇はない。

セイバーさんに刻一刻と危険が迫っているのだ。
女性がセイバーさんに向かって大剣を一閃する。

俺は思い切り体勢を低くし、女性の一閃とセイバーさんの間に割って入る。

そして俺は来るべき衝撃に備えその場で屈み、手に持った刀を地面に突き立てて受け止めるべく足に力を入れる。

「・・・！？ 兄君！？」

「あ、兄貴！！」

「な、なんでここに！？」

「くっ・・・！！」

遠くからの弓の援護が大剣に命中し、勢いを緩和させる。

内心で姿の見えない援護者に感謝し、その一撃を受け止めた。

「ぐっ・・・！！」

重い、だが先程の援護のおかげか受け止められないほどじゃない。
これが援護なしだったならば間違いなく俺は押しつぶされていただろう。

俺は攻撃の衝撃を利用し、そのまま後ろに思い切り飛んだ。

「ふう・・・」

俺は相手が追撃してこないことを確認してから一息ついた。
冷や汗が酷い。

震えはない、実は殺し合いは初めてじゃない。
以前に両儀と名乗る少女と一戦交えたことがある。

その時は両儀の友達の黒桐という眼鏡の少女に助けられたが、この
褐色肌の女性は両儀と違いあの特殊な眼を持ってないにしても、そ
れに匹敵する恐ろしさがある。

「大丈夫か兄貴!？」

心配だったのだろう。白が近寄ってこようとする。

「阿呆!油断するんじゃない、まだ終わっちゃいねえんだぞ!！」

「・・・!！」

しかし俺はそれを一喝した。

ここで見ていて分かったが足手纏いの白が敵に少しでも近づくのは
得策じゃない。

俺はこちらを何故かキョトンとした表情で見る女性に対峙する。
すると女性は俯きくつくつ、と笑い始めた。

「大したものだ、我が一撃に仲間を助けるべく潜り込み、あまつさ
え受け止めるとは・・・その刀、何か特殊な霊装か？」

「しゃ、喋った!？」

すると後ろにいた遠坂さんから素っ頓狂な声上がる。

そりゃ喋るだろう、力こそ人外じみているが人?なのだから。

それともこの戦いを切り抜けるのに重要なキーパーソンだとも言

うのか？

「どうした、遠坂さん。それはこの場で重要なことなのか？」

「だってバーサーカーなんでしょう！？バーサーカーは理性を代償に強力な力を得たサーヴァント、本来なら言葉を話すような知性を持たない筈よ！！それに退さんも何よ今の移動速度、貴方魔術を知らないんじゃないの！？それにその刀は一体・・・結構な魔力を内包しているようだけど・・・」

「はっ・・・えっと、魔術って・・・なに？」

「え？」

「え？」

お互いに？を浮かべる。

その様子を見た女性――バーサーカーさん？――は愉快そうに笑った。

「ふふ、実に面白い。魔術の存在を知らず魔術を使わずしてその実力か。一切の無駄を無くした動きの成せる技か・・・」

「リン、驚くのは無理もないわ。私も驚いたもの」

見知らぬ銀髪の少女が会話に割って入ってくる。

少女はどうやらバーサーカーの主人的な人物なのだろう。

その少女もバーサーカーに理性があつたのに驚いたという。

一体どういことなんだ？そもそも魔術って何？

「バーサーカーは勇猛EXのスキルを持っているみたいでね、どうやら狂化させる以外では理性を失わないようなの」

「そんな情報を私たちに教えるだなんて・・・随分余裕ね？」

「そりゃそうよ、貴方達じゃ私のバーサーカーに勝てるわけがないもの。なんて言っただって私のバーサーカーはあの大英雄ヘラクレスなんだから！」

「ヘラクレス！？そんな英雄がバーサーカーで能力強化されている上に理性があるだなんて・・・ってじゃあまさか宝具は！？」

「そう、十二の試練^{ド・ヘン}。12回の蘇生魔術の重ねがけ、だからバーサーカーは一、二回殺したくらいじゃ死なないんだから！」

それを少女が言くと、バーサーカーは少し悲しそうな表情で呟く。

「死なないといってもかなり痛いのだが・・・だというのにどうもこいつも『まあこいつ十二の試練越えてるし大丈夫だろ』って思いつきり無理難題押し付けおって、そのせいで男も出来ないし・・・うう・・・」

「・・・」

な、なんか可哀想になってきたんだが・・・。

しかし、恐らく175cm越えであろう長身のワイルドな魅力の女性が生ンと落ち込んでいると先程まで殺しあっていたとはいえ、こう・・・クルものがある。

「えっと・・・バーサーカー？」

「ぐすつ、なんだ・・・？勇敢なる者？」

「それって俺のことか？まあいいが、まあなんだ。あんまり気に入るな、俺はアンタみたいなワイルドなタイプ嫌いじゃないぞ？は、はは・・・」

口説いてどうする俺！

何サラつと変なこと言ってるんだよ！
恥ずかしい・・・。

「え、あ・・・うむ。あ、ありがとう・・・」

俺たちはお互い顔をあわせて赤くなって俯いてしまう。

そんな霧散した戦場空気に、除け者だった白とセイバーと援護者――アーチャー――が呟いた。

「なんでさ・・・」「なんですか・・・」「何故だ・・・」

この後、退達はまた戦いを再開するのだろうか？
それは、神のみぞ知る。

第五話（後書き）

どうも、闇口マです。

今回主人公が戦闘に乱入しましたが、せっかくなのでステータスだけでも参考につくってみました。

名前 衛宮 退

性別 男性

身長・体重 182 / 5 c m 72 / 3 K g

属性 秩序・中庸

筋力：D

耐久：E

敏捷：A +

魔力：E

幸運：B +

宝具：？

対魔力：D

いやあ、速さしか基本はありませんね。

腕があれば筋力がC + は言ったかもしれない。

また、バースカーのスキル設定については完全に私のオリジナルです。

バースカーのキャラが気に障った方は申し訳ありませんでした。なんか酷いバランスブレイカーになる気がしますね、いやなりませんけどね。

また、感想にて指摘を受けた点について多少の修正をしました。

まあうまく出来ているかどうかは全くわかりませんが。

では。

第六話（前書き）

今回いつもより短いです。
ではどうぞ。

第六話

「今日は興が冷めたわ・・・今度会ったら絶対に殺してあげるねお姉ちゃん」

「む、マスター。それはオヤジギャグというやつですね？いやなかなか・・・」

「何言ってるのバーサーカー！・・・もう、帰るわよ！」

「承知。ではセイバー、そして勇敢なる者・・・いやサガルと呼ばせてもらおうか。再び手合わせできる其の時を楽しみにしているぞ」

俺は最後まで気の抜けた雰囲気の抜けないことに苦笑した。
手合わせしたというほどのことではないと思うのだが、まあいいだろう。

「はい、バーサーカー。今度は理性ある貴方と正々堂々と剣を交えたいものだ」

「ははは・・・俺はもうあんな危険な思いするのは御免だぞ」

俺がそう言うのとバーサーカーはくつくつ、と笑った。

本当に戦っていた時とはまるで別人だと改めて驚かされる。

「まあそうつれないことを言っな。我とお前の仲ではないか」

「どついう仲だ・・・」

すっかり友達ムードを出して接してくるバーサーカーにたじろぐ。
しかしあまりに上機嫌に言ってくるので、俺はまあ友達でもいいか、
減るものでもないしと思うことにした。

「もう！何してるのバーサーカー、早く帰るわよ！」

既にバーサーカーから少し離れた場所を歩いていたイリヤスフィー
ル——長いな、イリヤでいいか——は今だ俺の前にいるバーサーカ
ーに不満げに言う。

魔術師というのはよくわからないが彼女は見た目同様の性格のよう
だ。

「申し訳ありませんマスター、ではまた相見えようぞ」

「で、どういうこと？」

何故か敬語のなくなった遠坂さんが納得がいけないといった不満顔
で俺に詰め寄ってきた。

「というかやっぱり猫被っていたのか、俺の目は間違っていなかった
んだな。」

「どう、とは？」

「私も気になります。兄君が私を助けてくださった時のあの移動速
度、サーヴァント並み・・・それもあれはランサーに匹敵するかそ
れ以上」

「はあ・・・」

俺は気のない返事をする他なかった。

何故なら俺はランサーというのは勿論、サーヴァントとかいうものについても全くの知らないのだから。

俺が困っているのを見兼ねたのだろう。

正直ずっと空気だった白が口を挟んでくる。

「なあ、とりあえず家に戻らないか？話するならそのあとでも出来るだろう？」

「そうね、そうしましょ」

「了解しました」

どうやら一時だが呪縛から逃れられたようだ。

俺は内心で白に感謝し、皆で揃って帰路についた。

第三者に観察されていたのにも気付くことなく。

とある民家の屋根の上、そこに観察者はいた。

「ほお、面白いじゃねえか・・・生身であるバーサーカー（バケモン）を相手取るとはなあ。全くどうして根性据わったイイ男じゃね

えか、くつくつ・・・」

退達を観察していたのは青いボディースーツに身を纏い、毒々しいほどに赤い槍を携えた女だ。

女はニヤリと楽しげに顔を緩ませる。

しかし女はその愉快げな表情を歪ませ舌打ちする。

「やれやれ、マスターの命令がなけりや一戦交えてえところだったんだがな・・・でも、まああの戦力差じゃあ流石に無理があるか」

そう。

マスター本人たちはどうとでもなる。しかし彼らにはサーヴァントが二人もいる。

それも三騎士の内の二角、セイバーとアーチャーだ。

あの二人相手に彼女一人では分が悪い。

さらには彼女にとって今現在一番気になる存在、衛宮退もいる。

ただの人間であるにも関わらずサーヴァントと剣を交えることが出来る異様な存在。

魔術師ということを除けばまるで自分の前マスターのよう、と彼女は思った。

「さて、マスターの命令だしな。さっさと情報を持って帰りますかねえ」

女はぐつと足に力を入れて屋根から屋根へ飛び移っていき、やがてその姿は闇夜へ消えた。

第六話（後書き）

青い人が出てきました。

素早い人です。

ぶっちゃん退さん眼を付けられました。

では次回もよろしく願います。

第七話（前書き）

先に謝っておきます。ごめんなさい。

自分で書いてて意味わかんなくなっちゃいました。
本当にごめんなさい。

第七話

あれから衛宮邸へと帰った俺たちは居間で先の戦闘について話していた。

というより俺が遠坂さんに詰め寄られていた。

「・・・で？退さん？説明してもらおうかしら・・・」

「説明と言われてもなんと言えはいんだ、俺は魔術を知らないから魔術師側がどんなに異常性を感じていても俺はそっちからしたらどこが異常なのかわからないんだから説明しようがない」

「ああ、そうだったわね。いい？魔術というのはね・・・。」

長い説明で正直全部理解できなかったし覚えられなかったがつまりはこういうことだろうか。

「つまりは魔術は現代の科学力か何かでも実現可能なものを魔術的要素で成し得たもので、それ以外のもの。時間の逆行とかそういった現代科学か何かでも実現不可能なものが魔法・・・と？」

「そういうことになるわね。そして今回この街で起こっている戦い」

「今日のバーサーカーとの戦いがそうだったのか？」

「そう、聖杯戦争。聖杯という願望器を賭けた魔術師同士の殺し合い」

セイバー

ランサー

アーチャー

ライダー

キャスター

アサシン

そしてバーサーカー

そして七人の魔術師、それが。

衛宮 白

遠坂 凜

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

残りの正体不明の4人

その合計14人が聖杯——万能の願望器——を賭けて殺し合いを繰り広げる。

それが聖杯戦争。

なるほど、殺し合うに足る戦だと思う。

何せ何でも願いが叶うと言われている聖杯がこの戦の報酬なのだ。

死んでも手に入れたい宝なのだろう。

しかし解せないことがある。

そんな戦になんで無欲な我が妹まで参加している？この娘が万能の願望器という宝に心揺らぐとは思えない。というより殺し合いを許容するとは思えない。

「白、お前が参加しているのはまさか・・・」

「ああ、この馬鹿げた戦争を終わらせるためだ！こんなくだらないもの・・・終わらせないと」

「何故そこまで必死になる？お前がそういったものを許容できない性格なのはよく知っているつもりだ。だがそれでもだ、聖杯戦争に固執する理由にならない。殺しで言ったら現代の戦争だって殺人事件だって一緒だが、それを止めさせたいとは思うが実行は出来ない。それが当然だし普通だ」

「それはそうだけど・・・だけど！目の前で起こっている事なら少しでもあたしは何か出来る！止められるんだ！」

こいつは何を言っているんだろうか。

止める？あの体たらくで？先の戦闘で全く戦えていなかったのに？

「無理だ、お前のどこにそんな力がある？お前より間違いなく強いであろう遠坂さんだってバーサーカー相手には手も足も出なかったんだ。無論俺もな。バーサーカーに勝てる道理がない。」

「そうですね、正直な話私一人でもバーサーカー相手に一人で相手取るのは厳しい」

「ああ、私も弓もバーサーカーの前には歯が立たなかった」

俺の言葉にセイバーさんとアーチャーが同意する。

それに白は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「白、お前は昔言っていたな。己を犠牲にしても全てを救う正義

の味方になりたいと」

「あ、ああ・・・それが？」

「きつとその理想に則ってこの戦争に参加しているんだろうが、その理想が酷く矛盾しているというのをお前は解っているのか？」

そう、矛盾している。

全てなど救えるはずがない、それはどんな超人であれだ。

どんなに力が、金が、権力があっても全てを救うことなど出来ない。何故ならば・・・。

救われるものがあるということは救われないものがあるということだ。

例えば、金に困った男が銀行強盗をし、その事件を白が鎮圧したとする。

そうすれば捕まった者たちは救われるだろう。

だが犯人は？捕まった男はどうなるか？

救われはしない。むしろこれからの人生生きづらくなるだろう。

そこで矛盾が生まれる、全てを救うといったのに全てを救えていないのだ。

しかし、この事件では男は完全に悪だ。どんな理由があれどだ。

ここでもう一つ問題がある。白が目指しているのは正義の味方だ。

正義が悪を救ってどうするんだ？

救った悪が改心するとは限らないし、逆恨みで襲ってくるなんてことにもなりかねない。

彼女の理想は酷く矛盾している。

「だけど、それでもあたしは全てを救う正義の味方になりたい！あたしは、あたしは・・・！」

「白、俺は別にお前の志を否定はしないし賛成もしない。だが・・・俺はお前の兄だぞ？」

「・・・えっ？」

俺はポカンとしている白に笑いかけてやる。

「お前は俺の妹だ、最低限の手助けはしてやる。俺も今回のこの戦争はさつさと終わって欲しいからな。いいか白、全てを救うことはできない。これは断言しよう。だがすぐに納得も出来ないだろう。だからこれを踏まえた上でもう少し、お前の理想を見つめなおしてみろ。お前は一人じゃないんだ。一人で考え込むのはよしとけよ」

「・・・うん！」

俺は少し笑顔が戻った白に苦笑すると、頭を撫でてやる。

白はくすぐったそうにしながら、でも気持ちよさげに目を細めると、同時に殺気を感じた。

出どころはすぐにわかった。

遠坂さんの傍らに佇む銀髪の弓兵、先の戦いの援護者——アーチャ——からだ。

彼女は執拗に撫でられている白を睨みつけていた。

それはまるで、大事な人を取られて拗ねている子供のようなだった。

第七話（後書き）

もう訳わかんねえ、シリアスもう二度と書かないぞ。

第八話（前書き）

久しぶり？でもないか。
今回もイミフです。

第八話

「で、今度こそ聞かせてもらうけど退さんのその出鱈目な戦闘力は何？」

仕切り直しと言わんばかりに頑張って多少重たい口調で雰囲気を作る遠坂さん。

俺はその姿に不謹慎ながら微笑ましさを感じてしまったが、変な絡まれ方するのは御免なので口にしなくておく。

「俺の知り合いの女の子に会ったび会ったび殺されかけている賜物じゃないか？」

「は？」

遠坂さんは訳が分からないというような表情でポカンとしている。他も同様だ。白もセイバーさんも一般人の俺が結構な頻度で命の危機に瀕していたことに驚いたのだろう。しかし、何故かアーチャー——何故か呼び捨てしてしまう——だけは表情を変えずにむしろ「私は知っていたさ・・・」と言わんばかりのドヤ顔だ。何故得意げなのだろう・・・。

「いや、ちょっと待ってくれ兄貴。そんな話俺聞いたこと無いぞ」

「だって言っても信じないだろうしな、それに式は根は良い子だと思うぞ？」

「そのシキという者がどんな御人なのかはわかりませんが・・・何

故疑問形なのですか？」

なぜってそりゃあの子少し、いやかなり変わってるから。

彼女の友達的美樹ちゃんも可愛くて普通な良い子なだけだな。なんでいつも俺の居場所を特定できるのかが謎なのだが・・・探偵でも目指しているんだろうか？

「で、その式って人と戦って強くなったたでもいうわけ？その式って人も一般人でしょう？」

「ははは、一般人が常にナイフか刀携帯してるって？そんなはずないだろ？しかも動きがなんか常人じゃないんだ、あれ絶対裏の世界ってやつに住人だ」

「普通の人じゃないのね・・・でもここまで強くなる理由にはならないわよ」

納得しない遠坂さん。

そこにずっと黙っていたアーチャーが話に入ってくる。

「ふっ・・・リンにしろ衛宮白にしろまだまだだな。簡単なことだろう？その式という奴に何かしらの特殊な力があつたのではないかな？まったく衛宮退の妹が聞いて呆れる・・・」

「むっ・・・！」

アーチャー、合ってる。合ってるんだがなんで貴方はそんなに満足気なんだ。

そしてそうむくれるな白。

そう、式は確かに不思議な力があつた。

「直死の魔眼、式はそう言ってた。」

「直死？何だそれ？」

「直死の魔眼ですって！？」

知っているのか遠坂さん流石に博識だな。

「式のやつはなんでもかんでもバターみたいにスライスしまう力があるみたいでな、そんな奴に狙われてしまった俺は生き残るために戦えるようになるしかなかった。崖っぷちの人の力ってのは不思議なものだ。みるみる実力がついて、今に至る。まあ、式も多分甘えてきてるだけなんだろうが、ほら猫がじゃれるみたいな」

「猫がじゃれてくるのに直死の魔眼なんてあるか！！簡単に死ねるわよ！！」

そう言つて頭を抱える遠坂さん。そして呆れたように溜息を吐いた。そしてとりあえず納得できないが納得したようだ。

「確かに直死の魔眼の持ち主と殺しあつてたらそりゃ強くならざるおえないわよね・・・」

「なあ兄貴。直死の魔眼ってなんだ？」

直死の魔眼とは何か。

対象の死期を視認することが出来る代物だ。

簡単に言えばたいいていのものは何でも殺せる眼だ。

俺も詳しい事は解らないが決して万能な代物ではないと式は言つて

いた。

そういえばそろそろ彼女らに会いに行つてやらないとなあ。
機嫌を損ねたら死んでしまう。

「なるほど、とんでもない眼だな。そんな危険な眼持った相手によく生きてたな兄貴」

「そうだろう？そうだろう？大変だったさ・・・」

そう言つて遠い目をする俺。

あれ？何か涙出てきた。

「おかしいな、なんか涙でてきちゃったよ」

「泣きたいなら泣けよ兄貴・・・あたしの胸の中で「いや衛宮白、お前の貧相な胸で眠るのは心苦しいだろう？どれ、私が胸を貸してやる。存分に泣け、退。」アーチャー・・・あたしになんか恨みでもあんのか？」

「ふん、私がお前如きに恨み？そんなものは腐るほどある。それになにより、胸が貧相なのは事実だろう？」

「・・・！い、一応Cはあるぞ！」

「ふん、その程度か。私は因みにEだ。」

あれ、なんの話してたんだっけ。

全然内容変わっていないか？

何故胸の大きさの話になっているのだろうか。

「くっ、だけど胸は大きさじゃない！形だろ！」

「今言いこと言ったわ衛宮さん。」

「シロの言うとおりです。アーチャー、胸は大きさではない。」

「「形だ」「」」

何故ハモってるんだ。

共通意識でも芽生えたのか。

それをアーチャーは鼻で笑う。

「ふっ、所詮は無いものの妬みだ。それに私は形とハリにも自信がある」

「アーチャー。今は俺のほうが確かに胸はない。だけどお前にはない若さがある！」

「・・・貴様、口にしてはならないことを口にしたな・・・」

もう訳が分からない。

俺は何だかヒートアップし始めた面々を後目に居間を出た。

「おやすみ、皆。やれやれ・・・」

俺は居間と違い静かな我が家の廊下に少し安らかな気持ちになる。

ああ、静か「アーチャアアアアアアアアア！」「衛宮しろおおお

おおおおお！」だ・・・。

別段静かでもなかった。

「本当に、めんどくさい奴らだなあ。」

そんな言葉とは裏腹に、俺の頬は緩んでいた。
こんな夜も悪くない。

今宵は本当に、月が綺麗だ・・・。

第八話（後書き）

なんかごめんなさい、うん・

第九話（前書き）

なんかアーチャー壊れてて動かしやすいわー

第九話

翌日、何故か朝っぱらから遠坂さんとアーチャーが我が家の居間にいた。

居間を見渡しキッチンの方へ耳を澄ませるが、物音はない。白はまだおねむのようだった。だが今は妹はどうでもいい。

今日は朝練はないらしいし今日俺は仕事はない。

まだ起こす時間ではないのもう少し寝かせてやろう。それよりも気になるのは居間で平然と人の家の茶を啜る赤いの二人。何故ここにいるのだろうか。

「あら、おはよう退さん。早いね」

「おはよう」

「あ、ああ、おはよう。・・・なんでここにいるんだ？」

普通に挨拶してくる二人に俺はたじろぐ。

というかこの家は遠坂さん曰く結界が外敵の侵入を知らせてくれるではなかったのか。

俺は家の結界に疑問を抱く。しかしその疑問はすぐに自己完結する。ああ、なるほど。つまり遠坂さんに敵意がないから反応しなかったんだろうな。

そう考えて俺は自分で納得する。

「なんでって、白から聞いてない？」

「聞いてない。というか呼び捨てか、更に距離が縮まったようで何

よりだ」

「ふむ、凜。簡単に説明してやったらどうだ？退なら絶対、間違いなく、天地がひっくり返ったとしても私たちの考えを理解してくれるはずだ」

「そうね。それにしても私と白が少し歩み寄った位で喜ぶなんて、結構妹思いなのね？そしてアーチャー？少し自重なさい」

だからアーチャーはなんで俺に関することになるとこう性格変わるのだろう。

彼女は普段割とクールな感じの美女なのに。遠坂さんは少し悪い顔で俺をからかう。

だが俺は妹多いというわけではないと思う。

「別にそんなのではないさ。あいつは少し自分を粗末に扱いすぎている。だったら、白を引き止めてくれる聡明な娘に傍に居てもらいたいと思うのは当然だと思うが・・・俺もずっと白の傍に居てやるわけじゃないんだからな」

「あら、十分妹思いな良いお兄さんだと思いますわ」

「その通りだな。私としては相手が衛宮白というのは誠に遺憾だが退のその想いは、きっと衛宮白も分かってくれている筈だ。嘗てあたしがそうだったように・・・」

「アーチャー？」

「ああ、いや・・・なんでもない」

途中まではつきり話していたアーチャーだが、最後はボソリと呟く程度で聞き取れなかった。

しかし本人が何でもないと云うのならあまり詮索はしないでおう。

「それにしてもアーチャー？貴方やけに退の肩を持つわよね。万が一にもないと思うけど、退さんに近い人物だったのかしら・・・？」

「ふっ、どうだろうな。生憎、凜の乱暴な召喚のツケで記憶に混乱があるので解りかねるな」

「ちょ！そんなこと今言わなくていいじゃない！」

どうやら遠坂さんは少々？おつちょこちよいのようだ。

アーチャーはそんな遠坂さんをからかい笑っていた。

平和な風景だ。とても昨日あんな戦闘があったとは思えない。

いや、それより話がそれて忘れていたことがあった。

「それで、結局なんで二人はここに？」

「ああ、そうだったわね。実はね、私と白は同盟を組んだの。対バーサーカーのね」

「バーサーカー、ああ・・・あのとてつもなく危険な輩か・・・可愛らしいところもありはしたが」

「そう。そのバーサーカーなんだけど、どう考えても私とアーチャーじゃ適わない。勿論白、セイバーも同様ね。セイバーは戦えるとしても白が足手纏いになるし、相手はあの大英雄ヘラクレス。その

上バーサーカーのクラスにも関わらず自我を保ちつつバーサーカーのクラスになる際の能力強化もしっかり付いている。で、極めつけに宝具『十二の試練^{ゴッド・ハンド}』」

「うわ、実際に相対したから余計に危険さが窺えるな。それにヘラクレスっていえばあらゆる武器の達人だ。反則もいいところだな。なるほどな、個々じゃ適わないから同盟・・・か」

「そういうこと。それで同盟を組むなら住まいを共にしたほうが何かと都合がいいの。というわけで私今日からここに住むから」

突然だな。まあしかし俺としては遠坂さん白の傍に居てくれるというのは助かる。

俺は別に構わない。白も別に気にしないだろう。

問題は大河と桜ちゃんだ。

「はあ、俺は別に構わないが、他の住人の説得は自分で何とかしてくれよ？俺は責任持たんからな」

「勿論、この遠坂凜。見事に皆さんを丸め込んでご覧に入れますわ」

「では、私は最初に少し希望を出しておこう。相当重要な案件だ。」

唐突にいやに真剣な表情でアーチャーは話してくる。

重要な案件とは一体何のことだろうか。

「私は退と同じ部屋が「アーチャー、貴方は終始屋根の上で周囲を見張ってなさい。以上。」なに！凜、それはあんまりだろう！」

「令呪使うわよ？」

「・・・ぬぐう。」

あまりに締まらない一同であった。

第九話（後書き）

凜が衛宮邸の住人に。

アーチャーは屋根上に永久就職し・・・かける。

第十話（前書き）

あのお方が出てくるでしょう

第十話

今日、あたしは珍しく土蔵ではなく部屋で目が覚めた。

理由は単純、昨日は遅くまでアーチャー達と聖戦ジハードを繰り広げていたから土蔵に行かなかったからだ。

しかしあたしは少しだけ違和感を覚える。違和感の正体はすぐにはわかった。

「兄貴の声で起きられなかったから・・・かな？つて、何言ってるんだあたし！？これじゃまるであたしがその・・・兄貴に起こしてもらえないと寂しいブラコン女みたいじゃないか・・・」

あたしは頭を抱えながら布団の上で恥ずかしさのあまりゴロゴロと転がる。

少し涙目であたしは布団から立ち上がる。

「そんなことはどうでもいいんだよ。それよりアーチャーのあの兄貴への態度はなんなんだ！まるで・・・そう！あれじゃまるで恋する乙女だ！・・・まさかな」

あたしは猛烈な不安に駆られた。

何せアーチャーと兄貴はまだ会って二日位だ。

そんなハイスピードで恋に落ちるなんてあるわけ・・・。

「で、でも恋愛に時間は関係ないって椎名が言ってたし・・・ううう、うああああああああ！！」

慣れないことで悩んでいたあたしの頭は、早朝からオーバーヒートした。

いつもの様に目を覚ます。

目を開くとそこに広がっているのは相も変わらぬ白い天井だった。
俺——両儀式——は眠っていたベッドから身体を起こし己の住んでいる部屋を見渡した。

特に目を引くものはない。あるとすれば衣装掛けに掛けられた赤いジャケットに、フローリングの床に直に置かれた電話位なものだ。

俺は冷蔵庫に向かい、それを開くと水の入ったペットボトルを取り出し、口を付けた。

とある夢を見て身体が火照っていたからいつにもまして喉を通る清涼感が心地好い。

「・・・ふう」

無意識に溜息を吐いた。

夢というのは割と付き合いの長い友人——黒桐美樹——とこれまた付き合いの長い友人——衛宮退——の夢だ。

自分らしくもなく幼稚で可愛い夢だった。

三人で街に繰り出して、飯食って、いつもは行かないような遊園地みたいな施設ではしゃぐ。

そんな俺らしくない夢だ。

しかし夢に見たということは少なからずそう言った願望が内にあるのだろう。

ならば実行に移せばいいと思う。だがそれは叶わない話だ。

美樹は呼ばなくてもふらりと現れるだろうが、退はそうはいかない。何より住んでいる街が違う。アイツは普通に仕事をしているからそうそう会えないのだ。

「・・・会いたいな、退に」

出会いはただ俺がアイツを襲った。それだけだ。

しかしアイツは予想外に良い動きで俺を迎撃した。聞いた話じゃ戦いに関しては素人だったらしいが元々才能があつたのだろう。アイツはその殺し合いの中で凄い速度で力を付けていった。

流石に素人に負けることはなかったが、それでも退は凄かった。

だから俺は家に連れて帰り、一応手当をした。

その時偶然家に来た美樹に男を連れ込んだと勘違いされたときは内心少し焦った。

それからだ。俺と美樹と退の付き合いは。

「こんにちわー、式？起きてるかな？」

物思いに耽っていると聴きなれた声が玄関から聞こえた。噂をすれば影、十中八九美樹だろう。

「ああ、美樹か。鍵は空いてるぜ」

ガチャリと扉の開く音がする。直ぐに美樹は姿を現した。

普通の容姿に黒尽くめの眼鏡女。だが眼鏡で解りづらいだけでその実、美樹は美女だと思う。

しかし現れた当人は何やら膨れっ面をして怒っていた。

「まったく・・・式、鍵をかけないと駄目だってあれほど言ったじゃないか。式は女の子だし美人なんだから気を付けないと」

「俺が男に襲われるなんてあると思うか？」

「それは・・・想像つかないけど、万が一ってあるじゃない」

美樹の言いたいことはわかる。しかし、俺が鍵を掛けないのには理由がある。

退はこの合鍵を持っていないのだ。だから万が一アイツが訪ねてきたときに俺がいなかったら入って待っていていられるようにという俺なりの配慮だ。

しかし美樹にそれを伝えると・・・。

「あはは、式って本当に退さんの事好きなんだねえ」

俺は納得がいった。

そう、好きなんだ。好きだから近くに居ないと寂しい。ただどアイツは近くどころか街さえ違う。

自覚してはいたが改めて思うと少し恥ずかしいものがある。

「そついう美樹も・・・だろ？」

「ふふふ、まあね。式の恩人だし、小川マンションでは助けてもらっちゃったしね」

あの時本当にかっこよかったよ、と微笑む美樹。しかし少しすると少し、ほんの少しだけいたずらっぽい表情で笑って言った。

「ねえ、式。会いに行ってみない？退さんに」

「行く」

気づいたときには俺は即答していた。

仕方ないと思う。会いたい。会って色々話したい。
出来たらちよつと戦いたいなと思わないでもない。

「じゃあ二日後、駅で待ち合わせよう。遅れちゃ駄目だよ？式」

「ああ」

「ふふふ、式凄くワクワクしてたな。付き合いが浅い人にはわからないレベルでだけど」

ボク——黒桐美樹——は式の家の帰り道、退さんに会いに行こうというボクの誘いに乗ったときの式の様子を思い出し、思わず笑みが溢れた。

それにしても式は相変わらず私生活での危機感がなさ過ぎると思う。式は中性的で綺麗な顔立ちで肩口で切り揃えられた髪もさらさらで綺麗だ。

更にはいつも和服にジャケットという変わった恰好なのにそれすら違和感を感じさせない美人だ。

なのにあの危機感のなさ、一時は眩暈がしたものだ。

「まあ、それもきつと愛ゆえなんだろうけど」

式が退さんのことを慕っているのは一目瞭然だ。

かく言うボクも彼のことを慕っている。異性としてと言っても過言ではないくらいに。

「なんだか、遠足の前日の小学生の気分だよ。ボクも何だかワクワクしてきちゃったよ」

ボクは遠出する事を伝えるに、上司——蒼崎橙子——の元へと向かった。

その頃噂の退はといえば。

「だから胸なんて飾りだって・・・言ってるだろうがあああああ
！」

「ふん、まだわからんのか。貴様では私には勝てん」

「アーチャー、そのような態度では足を掬われますよ」

「どうせ、どうせあたしは胸が小さいわよ！悪かったわねえ！！」

「まだ続いてんのか、その話題」

朝皆が集まったと思ったらまた聖戦を始める4人に呆れ果てていた。

第十話（後書き）

はい、式と黒桐さん登場です。

どいう立ち位置にしようかしら

感想で指摘された式の容姿の描写を追加してみました。いかがでしょうか。

第十一話（前書き）

今回はなんてことはない新しい出会いのみです

第十一話

「さて、なんか白達の不毛な争いは終わりそうもなかったし仕事もないから適当に歩いてみたが・・・。」

俺は何となく柳洞寺へ足を向けていた。

久しぶりに赴いた柳洞寺には少し違和感があった。

そう、それは酷く単純で門の前にあった。

長刀を背負った時代錯誤な中世的な美貌を持ったポニーテールの侍が門の前で暇そうに胡座をかいているのだ。

その侍はこちらに気づくとチラリと一瞬こちらを見たあと溜息を吐いて退屈そうに頬杖をついた。

何なんだあの侍は。あんな侍いただろうか。

いるわけない。いくらなんでも時代錯誤すぎる。

冬木にあんな流麗な侍コスプレ人間がいるなんて噂一度も聞いたことがない。

あれほど美しい人ならば噂になるはずなのだが・・・もしかして、いやないとは思っただが。

サーヴァント・・・だろうか？

刹那、侍は突然立ち上がり、凜とした佇まいでこちらに近づいてきた。

形の良い唇から美しくも少し冷たさを感じる声が紡がれる。

「お主、私の暇潰しの相手になってはくれまいか？」

俺は突然の行動に少しの間固まってしまう。

まさかこの時代に生まれて待つばい人に話しかけられるとは思わなかった。

俺が反応できないでいると侍は露骨に残念そうに溜息を吐く。

「・・・やはり聞こえんか。姿を晒せばよいのだがな・・・しかしそういうわけにもいかぬか。私は今はサーヴァントなのだから」

俺は安全を考えるならサーヴァントに迂闊に話しかけるべきではないと思ったが、この侍なら大丈夫なんじゃないかと思った。何か凄い暇そうで気の毒だし。

「あー、えっとお侍さん？姿見えちゃってますよ？」

「えっ・・・？」

侍は俺の方へと目を向けるとその涼やかな美貌が満面の笑みに変わる。

「お主、私が見えるのか！」

「あなたはもしかしてサーヴァントですか？」

サーヴァントという単語を聞くと侍は冷静に問うてきた。

「お主何故サーヴァントを知っている？もしかや魔術師か？」

「いや、俺は魔術師じゃない。少し面倒事に巻き込まれた一般人だ。あと姿見えてるのは貴方が霊体化するの忘れているだけでは？俺にそんな霊体見る特殊能力なんてないし」

「なに？」

すると侍の姿が一時消える。

そして少し経つとするとちよつとだけ恥ずかしそうに侍が現れた。

「どうやらお主の言うとおり霊体化を忘れていたようだ。いやいや恥ずかしい姿を見せてしまったな。あまりに暇で霊体化を忘れてしまつとは気を抜きすぎていた。しかしお主まさかとは思うが、聖杯戦争に巻き込まれたか」

「ああ、偶然サーヴァントの戦闘に居合わせてしまひまして」

俺は侍と話していて少し違和感を覚える。

遠坂さんの話ではサーヴァントは目撃者、魔術的なものを目にしてみつた一般人は排除してしまうものだと聞いた。

しかしこのサーヴァントにはそのような素振りが一切ない。

「あの貴方は何故ここに？」

「ふむ、久方振りの話相手だ。他言せぬと約束するのであれば話そう。いや、愚痴を聞いてはくれぬか？」

なにやらこのサーヴァントにも色々事情があるらしい。

俺はなんか苦勞してそうだし愚痴を聞くくらいならいいかと頷いた。

「なるほど、ここで門番を」

「うむ、私のマスター・・・これがとんでもない女狐なのだが。その女狐にこの山門を依代に召喚されてしまつてな、ここから動けんだ」

そう言つて侍は溜息を吐くと何か思い出したのか「あつ」と声を上げた。

「名乗るのが遅れたな。私はアサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

「佐々木小次郎？つていうことは男性の方だったんですか？てつきり女性かと・・・」

「いや、私は女だが？」

「え？」

「ん？」

佐々木小次郎とは男ではないのか？

深く気にしない方がいいのだろうか？

・・・気にしないで置こう。俺にとってさほど重要なことでもない。

「いえ、すみません。何でもありません。アサシンさんと呼びしても？」

「敬語はいらぬ、アサシンでいい。久方振りの話し相手なのだから余所余所しいのは少し寂しいものであるう？」

「そうですか・・・じゃあよろしくアサシン」

「うむ」

正義の味方を志す少女の兄と群青の侍の邂逅。

第十一話（後書き）

アサシンさん出ました

ポニーテールが素敵な美人侍さんです

得意技はなんか同時に三回切れる凄いヤツ

番外 衛宮兄妹の朝（前書き）

色々捏造が入っています

番外 衛宮兄妹の朝

あたしの兄はよくわからない人だ。

何年も共に過ごしてきたのに分かることと言えば片腕を10年前の火災で無くしたと穂群原学園で清掃員をやっているということ位か。

あ、あとは好きな服のデザインとか好みの味付けとか趣味とか身体を洗う順番とか。

まあそんなことはどうでもいい。

今日はそんな兄とあたしの朝の様子を見てみようと思う。

兄の朝はあたしを優しく、優しく起こしてくれるところから始まる。何を隠そうあたしは朝が弱い。直そうと努力してはいるのだが今だ克服できていない面だ。

これでは正義の味方なんて夢のまた夢じゃないか……。

「おはよう白、ほら寝癖がついてるぞ。直してやるからおいで。どうせまだ覚醒仕切ってないんだろ？ 後で慌てて直すのも手間だろうからな」

「ふみゅ……」

そう言って優しく、【本当に】優しく兄は寝癖を直してくれる。頭を優しく撫でられているようで心地好いものだ。

意識が覚醒し始めたところで兄の姿を確認する。

所々が少しハネた短い黒髪に黒曜石の様に綺麗な黒い眼。

灰色のＴシャツに黒いジーンズ。

容姿は眼が多少つり上がっておりお世辞にも美男子とはいえないが身内鼻屑を抜きにしてもそこそこに整っている。そして正直見た目真っ黒だ。

そんな兄だが今まで女性の影があったことはあまりない・・・なんてこと言うとも思ってたか。

あたしの友人である間桐椎名。

間桐家の長女で容姿端麗、頭脳明晰、更には気が利いて優しいという完璧なヤツだ。

その椎名が好意を抱いているらしい。

椎名は昔、家で色々なことがあって荒れていたことがあったらしい。話では自分にはある才能がなくて絶望したのだとか。

それで荒んでいたときに偶然現れたのが兄だったそう。

そして兄は椎名にこう言ったそう。

「才能がない・・・か。誰しもが通る道ではあるし何の才能がなかったなんてのは聞きはしない。君の事だ、相応の努力だってしたんだろう。だがそれが報われず今に至る・・・か。それで絶望したのかい？」

「そうよ、間桐家においてその才能なくしては長女たる資格はない！私がいる意味すらも！」

「それで君は諦めたのか？」

「え？」

「その才能のない分野を別の何かで補おうという気概は君にはなかったのか？俺の知っている君はもつとしぶとかった。何かあると前を向いて歩く娘だった。とはいえ俺だってその家柄で必要な才能がないと言われれば君のようにならないという保証は出来ない。所詮はもしもの話だしな」

「・・・」

「だが君は、そうじゃないだろう？君はそこで諦めるような人間ではないはずだ。俺が言っても説得力は皆無だと思うがな。まあ、少しでも気に留めてくれれば嬉しい。じゃあな」

「・・・そう、か。まだ終わってない。私は間桐家の跡取り、間桐椎名。こんなところでへこたれて立ち止まっている暇なんて私にはない・・・やってやる、そして絶対に御爺様を見返してやる！そして桜も私が救い出す・・・いつか必ず！」

あたしは詳しくは知らないがその兄のおかげで椎名は今に至るらしい。

兄曰く、「俺はあの娘の中の有り余る闘争本能に油を注いだただけだ。まあ要は焚きつけただけだ」らしい。

椎名もそれは知っていたらしいがそれでも助かったのは事実だからと改めて礼を言ったそうだ。

正直、何でもかっても妬ましい。

後、怪しいのは何人かいるが断言はできないので伏せておく。

「よし直ったぞ・・・どうした白。ぼーっとして、」

「え？いや、何でもないよ兄貴」

「そうか、何かあつたら言えよ」

「うん」

あたし達は何年も一緒にいたんだ。今では義理とはいえ兄で同じ苗字を貰った、唯一の肉親だ。

兄はたまに抜けているし隠し事も多いし、聞いてもはぐらかしちゃう掴みどころのない人だけど。

あたしにとつてはどこまでも頼れる、頼もしいお兄ちゃんだ。

「兄貴」

「どうした？白」

「あたしを置いてどっか行ったりしないでくれよ。もう二度と、大きなモノを失いたくはないから」

「・・・お前こそ、俺から離れるんじゃないぞ。今までもそうだったように、支え合って生きていこう」

「うん・・・約束だ」

血筋の異なる、それでも間違はなく家族である二人の、朝の一頁だ。

番外 衛宮兄妹の朝（後書き）

主人公についての描写がないと指摘を受けたので執筆いたしました
番外編です

細かい描写はできませんでしたが大まかな容姿、人格が分かってい
ただけたら幸いです

次回から本編に戻ります

アンケート

突然ですがアンケートを取らせてください。

多少聞き覚えがあるかと思うんでもないですが、言峰綺礼や間桐のじいさまなどTSについてです。

私はとりあえずお爺様などのキャラをTSするつもりは毛頭ありません。

だがしかし言峰氏については少々悩んでおりました。

ほら、シスターさんって素敵じゃない？

爺様はTS無しほぼ確定です。

という訳で内容は言峰氏のTSの有無。

1、言峰TS有り 少し底の知れないシスターさん・・・素敵じゃない？

2、言峰TS無し 何気に主人公とこう食事し談笑とかする仲とかにしたら面白くね？無理だろうけど

というわけでよろしければご協力くださいませ。

アンケート方法はメール感想方法は問いません。

アンケート終了は相当数集まったら随時終了します。

その時は新話を更新するでしょう、実質私が次回更新するまでが期限になります。

ではよろしくお願いします。

第十二話（前書き）

泰山についてあまり覚えておらず、脚色してしまっている場所があるかもしれませんが多目に見てくださると嬉しいですよ。

第十二話

「私は山門から離れることは出来ぬ、故に退に頼みがある・・・」

そう言つてアサシンは神妙な面持ちで俺を見る。

俺はその雰囲気黙つて用件を聞かざる終えなくなる。

一体何を頼むつもりなのだろうか。

「この時代にある菓子で共に茶でもしたいのだが…どうだろうか？」

「・・・そんなことか、ああ構わない。どんなものもいい？」

俺はあまりに軽い内容の頼み事に拍子抜けしたが、佐々木小次郎といえど女性。この時代のお菓子に興味あるのだろう。自分で食いにいこうにもアサシンは山門に縛り付けられているため行けない。

俺はアサシンの頼みを承諾する。

するとアサシンは嬉しそうに微笑んだ。

「そうか、引き受けてくれるか。せっかく友が出来たのだ、談笑の一つでもせねばな！」

「友?・・・ふふつ、そうか、そうだな。俺たちは友達だ」

「そうであろう?はっはっは！」

少しの間俺たちは笑い合う。

同じ時代に生まれなくともこうして出会い、友情を結ぶことが出来る。

俺は今日この時初めて魔術というものが少し悪くないものだと思うた。

アサシンが所望したお菓子は何でもいいのことだった。

何故と聞けばなんてことはない当たり前な言葉が帰ってきた。

『私はこの時代の菓子をよく知らぬ・・・』

『・・・ですよねえ』

考えてみれば当たり前だ。彼女は佐々木小次郎、この時代の人間ではない。

なればこそこの時代について詳しく知らないのは自明の理。

聖杯がある程度知識を与えてはくれるらしいが流石にそんな知識は与えてくれないのだろう。

「うーむ、何にしようか・・・」

アサシンが求めているのは恐らく和菓子ではなく洋菓子のような食べたことのない菓子だろう。

この際お茶に合う合わないは考えないでおこう。

「となると・・・プリンだな。間違いない、ベストオブ現代のお菓子だ。プリン以上に素晴らしいモノはないと確信している。俺の中では――！」

プリン・・・俺はあれが大好きだ。

以前大河に冷蔵庫のプリンを食べられたときは流石の俺も刀を抜きかけたものだ・・・。

物思いに耽つてもいられない。あまりアサシンを待たせるのは悪いだろう。

凄くウキウキしていたし・・・早めに買ってきてやろう。

そしてプリンを買った帰り・・・あんなことがあるとは夢にも思わなかった・・・。

「まさかプリンがどこにもなくて五、六軒はしごさせられるとは思わなかったぞ・・・」

俺は項垂れながらアサシンが待っている柳洞寺を目指す。

刹那、悲鳴が聞こえた。

「ぐああああああ!!」

高く澄んだ美しい声だが品性の欠片もない悲鳴だった。

しかし品性があるとかないとか関係ない。

俺はとにかく悲鳴がする方へと走った。

「じ、じは・・・」

そこは一軒の中華飯店だった。

一見普通の中華飯店だし、味も悪くない。むしろ良いほうだろう。だが、この店——泰山——には一つ問題のあるメニューがあった。

それが・・・【麻婆豆腐】まーぼーどふ。

あれは凡そ人類が食してよい食物ではない。

一種の兵器と言ってもいいだろう・・・と白が言っていた。

俺は食えたし美味かったんだがな・・・『少し』辛かったけど。

「しかしここから悲鳴が聞こえたということは・・・そういうことなんだろうな」

間違はなく麻婆豆腐を食べて悲鳴を上げたのだろう。

常人は一発KOらしいからな。白曰く。

「やれやれ・・・一体どんなやつなんだ？」

俺は恐らく泰山の麻婆豆腐を食べて悲鳴を上げた相手を見に泰山へと入っていった。

「いらっしやいませアルー！あれ？退さん？久しぶりアル」

出迎えてくれたのは小柄な女性だ。
泰山の定員で、わりと仲がいい。

「ええ、お久しぶりです。悲鳴を聞いて駆けつけましてね・・・麻婆？」

「麻婆アル」

「案内してもらえますかね」

「勿論アル」

店員に引き連れられた場所には一人の長身で金髪の女性が倒れていた。

白目を剥いて気絶しているが・・・。

「ふう・・・このままにしておけんか。店員さん、店の奥を借りても？」

「退さんだつたら安心アルネ。いいアルよ」

店員の下承を得ると俺は女性を背負い、店の奥へと入っていった・・・。

第十二話（後書き）

というわけでアンケート結果を発表させていただきます。

18対3でアンケート1、TSしよわず、が勝ちました。
という訳で言峰氏はTSしてシスターさんとする方向で話を構成していかうと思ひます。

アンケートを2にしてくださった方はご期待に添えず申し訳ござい
ません。

また、アンケートに答えてくださった21名の皆様、ご協力ありが
とうございました。

第十三話（前書き）

どうもです

今回かなりの手抜き感が出ています

手を抜いたつもりはありませんがどうも文が浮かばなくて・・・ではどうぞ

第十三話

あれから俺は白目剥いた金髪女性を店の奥の控え室に運んだ後、いくつか配置してあったパイプ椅子を並べて簡易的なベッドを作りその上に女性を寝かせた。

そして干してあったタオルを濡らして女性の額にのせた。

女性は今だ「まーぼーが・・・まーぼーがくる・・・ううう」と魔されている。

恐らく彼女にとってこの泰山はトラウマとなつたに違いない。

「やれやれ、あれは中々美味しいと思うんだがなあ・・・そうお目にかかれない辛さで」

俺は何故あれで気絶するのか理解できず思わず唸る。

刹那、寝かせていた女性の目が開いた。

女性は思い切り身体を起こし・・・。

「はっ！妾は一体ぎゃふ！？」

パイプ椅子ベッドから思い切り落下した。

そりゃ落ちるだろうな。所詮パイプ椅子だからそんな横幅ない上に思い切り身体を起こせば・・・。

「大丈夫ですか？」

俺は一応身を案じる。

そして彼女の前で腰を落とし起こしてあげようと手を差し出す。

すると女性は赤い瞳で俺を何故か睨みつけると思い切り立ち上がり口を開く。

「貴様何者だ？妾の前にいるのだ、まずは貴様から名乗り出すが礼であろう？それすらままならず剩え妾を見下すとは・・・分を弁えよ下郎」

・・・なんだこの人。

名乗らないのは多少こちらに配慮が足りなかったかもしれないが、見下すって確かに物理的には見下したが・・・。それに分を弁えろってどこぞのお偉いさんか何かか？

それに妾なんて一人称あまりにも時代錯誤・・・時代錯誤？

『この時代にある菓子で共に茶でもしたいのだが…どうだろう？』

しまった！アサシンが待っていたのを忘れていた。

謎の金髪女性に構っている暇はない！

・・・のだが。

「申し訳ありません。俺は衛宮退、ただの清掃員です」

「ふん、分かればよい。せっかくだ。妾も名乗るとしよう。妾の名を聞いたことを光栄に思うがいい」

「・・・」

なんだこい・・・この人は。

めんどくさいって話じゃないぞ。ていうかなんで上から目線なんだ。それに妾ってやっぱ時代錯誤だな。

もしかして・・・サーヴァント？サーヴァントであるならばまず生まれた時代が違うのだから時代錯誤感もうなずける。

いや、そんなはずはないだろう。一日に二人もサーヴァントに会う

なんてそんなことあるわけじゃないか。根拠はないが。しかしこの女性の相手がめんどくさいのは間違いない。俺の感言っている……。

こいつ……この人と関わるとめんどくさい且つ長くなると。早々に切り上げて逃げるとする。

「それでは俺は人を待たせているので」

そう言つて俺はダッシュで泰山を後にした。

後ろから女性の怒号が聞こえたが知ったことではない。

俺はあまりあいうタイプの女性は好みではない。

あまり関わりたくはないものだ……。

「今戻つたぞアサシン……」

俺はやつと柳洞寺まで戻つた。

俺の姿を確認するとアサシンは朗らかな笑顔で迎えてくれる。

アサシンの笑顔は何だか癒される。とてもに優柔らかい笑顔だ。

佐々木小次郎……かの剣豪とは思えない。

「おお、戻つたか。して……目的のモノは手に入つたのか？」

「勿論だ。お茶も割と良いものが手に入つたぞ。……変な女性に絡まれかけたが」

あの金髪の女性、めんどくさそうなのもあつたが何とも言えない危険な感じがした。

何がとは明言出来ない。それでも何とも言えない、逆らつてはならない感じがしたのだ。

「・・・今にしてみれば王様・・・暴君のような言葉遣いだつたな」

「？」

アサシンには俺の呟きは聞こえておらず、長いポニーテールを揺らしながらキョトンとした顔で首を傾げる。しかしそれも僅かな間で、アサシンはワクワクとした様子で俺に訪ねてくる。

「それで、退が買ってきた菓子は何なのだ？」

「ああ、プリンっていう菓子だ。どんなものは・・・食べてみれば解るさ」

そう言つて俺はプリンとお茶と紙コップと皿、そしてスプーンを取り出し、風情のあまりないお茶の準備をする。

プリンは容器から出せるタイプだ。俺はそれを皿に出し、コップにお茶を注いでアサシンに渡した。

アサシンはスプーンとプリンを交互に見る。

「このすぷーんとやらでぷりんを食すのか？」

「そう、そのスプーンでプリンを掬つて食べるんだ」

「そうか・・・では早速」

アサシンは恐る恐るプリンを掬い口に運ぶ。
すると不安そうだった表情からぱあっと明るい表情になる。

「美味だなこのプリンというものは！」

「はっはっは、そうだろう？俺も好きなんだプリン」

喜んで貰えたようで良かった。

梯子してまでプリンを買ってきた甲斐があったというものだ。

「それじゃあ、俺も・・・頂きます」

お茶が終わってから俺たちの談笑は続く。

気付けば辺りはもう暗く、それまで人が通りかからなかった事に奇跡を感じた。

通りかかられていたらアサシンにはコスプレポニテ女の称号が送られたに違いない。

サーヴァントと知らなければただのコスプレイヤーだし。

「退、そろそろ戻らなくてはならないのではないか？」

「確かに、そろそろいい時間だな。妹が心配しているかもしれない」

俺はお茶で出たゴミを買い物袋にまとめ、帰る準備をする。

「退。また会いに来てはくれまいか？一人では暇なのだ」

「ああ、また必ず来るさ。アサシンといると何故か癒される」

「くつくつ、なんだそれは？」

アサシンは俺の言葉に笑顔を零す。

俺は「じゃあまたな」と帰ろうとした。
刹那。

「マスターの命令で柳洞寺に偵察に来てみれば・・・まさかバーサーカーと戦った兄ちゃんがいるたあな・・・俺は運がいいねえ。」

殺気を感じた。

こちらに向かって突進してくる謎の青い影。

その影はとてつもなく速く、暗闇の中ではその姿を認識することも難しい。

恐らくサーヴァント。

ならば同じサーヴァントに行くかと思いきや、その影は一直線に俺に向かってくる。

そして影が思い切り突き出てきたのは赤い槍。

禍々しい雰囲気を漂わせた物体。

その槍の一撃は、その攻撃を繰り出してきたモノ同様に鋭く、速い。

「ぐっ!!」

俺は辛うじてそれを身体を捻って躲す。

そして体勢を立て直し、影・・・襲撃者の姿を確認した。

蒼いボディースーツに身を纏い同じく青く所々がツンツンとはねている長い髪を後ろで束ねた女だ。

俺は女に問うた。

「あんた・・・何者だ」

「ランサーのサーヴァント・・・一手手合わせ願おうか？」

第十三話（後書き）

金髪ねーちゃんの出番ではなかったですが、
すぐすぐ再登場するかとは思いますが。

かわりに現れたのはランサー。
どうなることやら。

第十四話（前書き）

お久しぶりです

第十四話

「ランサーのサーヴァント・・・」

「ああ、お前さんの事は知ってるぜ。バーサーカーと短時間ながら戦い生き残った一般人・・・。いや、魔力を纏っていないとはいえあのバーサーカー相手に生き残ってたんだ。一般人の部類じゃあねえわな」

俺はランサーのサーヴァントが言うバーサーカーとの戦いを思い出す。

彼女の技術と力とスピード、体力。

どれをとっても敵うものがなかった気がする。

それを見ていたというランサー。

どうでもいいが聖杯戦争とやらには女性しかないのだろうか。

「それで・・・それが一体俺を襲撃したのとどう繋がるんだ？」

「簡単な事さ。それほどまでの武人を前にしているんだ。手合わせ願いたいと思うのは同じ武人として当然だろう？」

どうやらランサーは俗に言う戦闘狂のようだ。

どこの英雄だか知らないが酷く困る。

何せ今は・・・。

刀を持ってきていないのだから。

「さあ、一手手合わせ願おうか・・・兄ちゃん」

「くっ・・・」

俺はとにかくランサーから距離を取ろうと足に力を入れる。
刹那。

「待て」

凜とした声が俺たちを制止した。

声の主はアサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。
その手には月明かりに煌めく一振りの長刀。

「・・・貴様、何者だ。サーヴァントのようだが？」

「アサシンのサーヴァント・・・佐々木小次郎」

アサシンが名乗るとランサーは驚きのあまり先程までの獣のような
表情から警戒心を剥き出しにした表情になる。

無理もない。遠坂さんに聞いた話ではサーヴァントが真名を明かす
のは弱点を晒すようなものなのだという。アサシンはそれを躊躇い
なく行なったのだ。警戒するのも当然と言える。

「貴様・・・何故真名を明かした？」

「何故とは？立ち会いの前に名を明かすのは当然であろう？」

「ほう・・・？つまりお前が俺の相手をする？」

ランサーの言葉にニヤリと笑うと快活にアサシンは笑う。
ランサーはそんなアサシンを訝しげに見る。

「見たところ、今退は獲物を所持しておらぬ。まさか丸腰の相手、それも友が襲われているのを黙ってみているほど私は残酷な人間・
・いや、サーヴァントではない」

「・・・何故一々言い直したんだ？」

「いや、よく考えると私は今は人間ではなかったのだと思い出してな。ハッハッハ」

アサシン・・・こんな状況で天然さを出さなくていいだろう・・・。
ランサーも困り顔で佇んでいる。
その時アサシンがこちらに声をかけてくる。

「退、今のうちに退け。ここは私が」

「・・・頼む」

ここはアサシンの言うとおり退くべきだろう。
このまま残ったところで何を出来るわけでもないし、体術も出来るがサーヴァントを相手に出来るほどの練度はない。
ならば一度ここは退くべきだろう。

「すぐに戻る。それまで頼んだ！」

「ふっ、任せておけ。私もそれなりに腕には自信がある。そう簡単には敗れぬよ」

「はっ！イイぜ、かかってきな侍。俺の槍、そう簡単には止められんぞー！！」

「果たし合おうぞランサー……！」

戦闘が始まると同時に俺は走る。

衛宮邸に向かって全速力で。

アサシンを信じているがそれでも万が一というのがある。

「まだ出逢ったばかりなんだ……終わらせるにはまだ早い！」

「うらぁああああ……！」

「ふっ……！」

赤い軌跡と青い軌跡がぶつかり合い火花を散らす。

その軌跡の正体は赤き魔槍とスラリと伸びた長刀。

それを担うは蒼き槍兵と群青の侍。

二人の間合いは常に一定。

アサシンは門の前から一步も動かずにいる。

ランサーは一步も詰め寄ることが出来ず、責めあぐねていた。

「流石はランサーのサーヴァント……大した速さだ」

「てめえこそ大した腕だな……まさか俺の槍が悉く受け流される
とはな」

「ふふっ、だがお互い奥の手は見せておらぬ。そうであろう？ ランサーよ」

ランサーはアサシンの言葉に嗤う。

そしてスツと槍を構えるとふっと息を吐いた。

「ならば喰らうか？ 我が必殺の一撃を・・・」

「面白い・・・」

アサシンもまたゆらりと刀を構えた。

お互いの間に緊張が走る。

そして、ランサーの槍にとてつもない魔力が籠もり始める。

その様子はまさに魔槍の名に相応しい。

・・・が。

「・・・！？ ちい・・・今良いところなんだがな」

「どうしたランサー」

アサシンの質問にランサーは構えを解きつまらなそうに溜息を吐いた。

「マスターの命令でな、帰還命令だ。せっかく良いところだが・・・すまんなアサシン。この勝負預ける」

「退くというなら追いはせぬ。私の役目は山門を守ることのみでな・・・」

ランサーはアサシンの言葉にハッ！と笑うと来たときと同じくとても速さで姿を消した。

ランサーが消えるとアサシンは一息ついて刀を収めた。

それも束の間、アサシンは新たな気配を感知した。

アサシンは長い階段の下を見る。

そこに立っているのは騎士甲冑に身を纏った小柄な少女だった。

美しい金髪を月明かりで照らす姿はとても美しく戦に臨んでいるようには見えない。

しかし、人は彼女の事をこう呼んでいる。

最優のサーヴァント【セイバー】と。

「急がないと・・・」

俺、衛宮退は土蔵に置いておいた刀を手には柳洞寺へと引き返す。

刀を取りに帰った時には既に衛宮邸は寝静まっており、何も言われることなく刀を回収出来たのは幸いだろう。

サーヴァントを助けに行くと言えば皆に何を言われるか分かったものではない。

「頼むから無事でいてくれよ、アサシン」

だが俺はこの時、まさか身内がアサシンと剣を交えているなど知る由もなかった。

第十四話（後書き）

もう書いててわけわかんねえ

第十五話（前書き）

おいおいー

第十五話

アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎は思っていた。
今日は何と来客の多い日なのだろうか。

柳洞寺は柳洞寺の僧以外はそうそう人の来ない場所だ。
それが今日はどうか？退を始め、先刻去っていったランサー。
そして……。

「……訊こう、その身は如何なるサーヴァントか」

目の前の騎士甲冑の少女。

十中八九サーヴァント、決めつけるのは早計だが外見から察するに
最優のサーヴァント……セイバー。

何と素晴らしき日なのだろうか、アサシンは内心で笑う。
そして紡ぐ、己の名を。

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

なんたる僥倖、己の幸運に感謝せずにはいらなかった。
しかし対照的にセイバーは驚愕を隠せずにはいらなかった。

普通ならばサーヴァントのが己の真名を明かすなどありえない。
己の真名を明かすことは己の弱点を明かすことと同義。

だが、セイバーの名を冠する通りセイバーは騎士だ。
名乗られたら名乗り返す。それが騎士の礼というものだ。
しかし、セイバーにとって真名を明かすということはあまりにもリ
スクの高い行為だった。

・・・が、セイバーにとってリスクより何よりも騎士としての信念に反することの方が我慢ならなかった。

「小次郎、と言いましたね。私は「いや、よい」・・・なに？」

「武士道、いや騎士道精神を持つものであったか。名乗られれば名乗り返さねばならぬと・・・そのような事で敵を知ろうとは思わぬ。無粋な真似をしたな。許せ、セイバー」

「・・・！何故？」

セイバーは己のクラスが知られていることに疑問を持つ。名乗ろうとして止められたのだ。知り得るはずがない、と。だが。

「何故とは？貴様の持つ獲物の正体こそ分からぬが、身に纏う殺気と美しき剣気は正に剣士。セイバーのモノであろうよ。言葉で語る必要などない。ただ出会ったからには剣を交える、サーヴァントとはそういうものであるう？」

「・・・なるほど、貴様の言うとおりだ。アサシン」

そう言つてセイバーは己の不可視の武器を構える。アサシンはニヤリと嗤う。

お互いの間にもう言葉は不要だった。

「さあ、果たし合おうぞ」

「我が剣技、しかとその眼に焼き付けるといい、アサシン！」

一方、衛宮退は。

「くそっ！何だこいつは！」

柳洞寺の階段の最も下の辺り。

セイバーやアサシンからはかなり離れた場所だ。今現在戦っている二人では気付きはすれど手は出せまい。

そんな所を退は姿の見えない謎の襲撃者に襲われていた。ただ解るのは相手の武器は鎖の付いた何かで刺突系の武器だということだ。

「・・・林の中から攻撃がきているのは間違いないんだが、武器が飛んでくるだけなら避けてられるが」

あまりにもジリ貧だった。

ただでさえ激しく動き回って逃げているのだ。

退の体力も無限ではない。いつか間違いなく疲弊したところに攻撃が刺さる。

のんびりしている場合ではなかった。

「一か八かだが・・・」

退は動きを止める。

賭けだった。果たして上手くいくかどうか解らない。

だが、疲弊したところを突かれるよりかは幾らかマシだと退は結論付けた。

「さて・・・」

上手くいってもその後がわからない。

そんな微かな不安を持ちつつ、退は刀を構えた。

「ふむ、どうやらただの人間にしては中々な手練のようですね」

林の中から獲物を狙う長い紫髪の女は己の攻撃を避け続けている獲物を木の上で観察していた。

黒髪黒い服なのは辛うじて分かるが顔はよく見えなかった。

そして女はもう一度攻撃を仕掛けようとし、止まった。

獲物が動きを止めていたのだ。

何を企んでいるか解らない故迂闊に手を出せない。

「何を企んでいるのでしょうか・・・」

女はサーヴァントだ。

マスターの指示で他のサーヴァントの戦力分析を命ぜられ柳洞寺に来ていた。

そこに偶然刀を持った男。

この時代の者ではない女でも夜中に刀を持った男がいるなど有り得ないくらいわかる。

それがただの人間ならば尚更だ。

だがライダーは見逃せなかった。

男から微弱ながら魔力を感じたのだ。

もし、男がマスターならば捨て置けない。

そう結論づけ奇襲をかけたのだ。

そして今現在に至る。

女は自分の考えは間違っていなかったと感じた。

男は魔力こそ使わないものの一般人からはかけ離れた戦闘力を有していたのだから。

「・・・少し様子見に一撃仕掛けてみましょう」

そう呟いて女は己の武器、鎖付きの釘を獲物へ投げつけた。

それを獲物——退——は。

刀をすぐさま収め、少し身体をずらし釘を掴んで思い切り女を引っ張ったのだ。

「・・・！そういうことですか、中々無茶をしますね・・・ですが」

退の誤算はただ一つ。

相手がこの女——ライダー——であることだった。

ライダーは引っ張られた釘を思い切り引っ張り返した。

彼女には怪力のスキルがあり、筋力を一時的に強化出来るのだ。

ただでさえ筋力の高いライダーが使用すれば、片腕しかなく力不足な退は必然的に逆に引っ張られる形となってしまった。

退は釘を掴んだまま引っ張られてしまう。

ライダーはニヤリと笑うと引つ張られてきた右腕で退の刀を抑え、左腕で退を木に抑えつけ身動きを取れなくした。

「中々の腕でしたが・・・残念でしたね」

そう言つてライダーは退の顔を真近で見て、顔を真つ青にした。

『いいかしらライダー、怪しい相手には別に容赦なくていいけど衛宮退という・・・えっと、この写真の男は絶対に襲っちゃいけないわよ？もし間違えて襲ったら・・・御仕置きしますからね』

『りよ、りようかいです、ますたー・・・』

「ど、どうしたんだ？一体・・・」

退は自由を奪われ死を覚悟したが、突如顔を真つ青にし、呆然としている紫髪のアイマスク女を呆然と見ていた。

一体ライダーはどうなってしまうのだろうか・・・。

その頃ライダーのマスターは・・・

「ん？何か退に危機が迫っているような・・・気のせいかしら？」

何となく察知していた・・・。

第十五話（後書き）

さて、結構出揃ってきました

第十六話（前書き）

どうもお久しぶりです

第十六話

「このままではマスターにお叱りを受けてしまいます、どうすれば・
・・うつつ」

俺は目の前で何やらオロオロしている先刻まで敵だった女——ライ
ダー——を見ていた。

見事に策を失敗しライダーに囚われた俺であつたが、ややあつて彼
女は謝りながら慌てて俺を開放した。

彼女の呟きを聞く限り彼女のマスターは俺に危害を加えないよう命
令を下しているらしい。

となるとやはり知り合いなのだろうか？ そうだとすると俺に少な
らず好意を抱いてくれている人物か、もしくは俺の身内が聖杯戦争
参加者と知っていて利用しようという思惑があるのか・・・。

どちらにせよ今はそのマスターの配慮により命を救われたのだから
感謝しておくでしょう。

やはりサーヴァントというのは常人の手に余るものだというのを改
めて感じる事が出来た。

式ならばサーヴァントといえど死闘の末に滅してしまいそうなもん
だが・・・。

「え？ マスター・・・えゝ！？」

考え事をしていると突然女は蛙が潰されたような声を上げた。

何事だろうかと見ていると女は見る見る顔色を変える。

青いと思えば赤く、赤いと思えば青く・・・大丈夫なのだろうか？

しばらくすると女は俺の方へと向き直った。

「マスターからの命により貴方を我がマスターの元にお連れしなくてはなりません。付いてきていただけないでしょうか？」

「・・・断ると言ったら？」

勿論戦闘力を考えれば俺は断ることなど出来ない。

だが相手はどうやら俺を襲えない。ならばそんな正体のわからない相手がいる場所に率先して赴きたくななどない。何が起こるかわからないし、万が一被害が身内に飛び火でもすれば目も当てられない。

「私が御仕置きされるので全力を持って力づくでも貴方を攫います」

「・・・行こう」

是非もなし。

俺が付いて行った先は俺もよく知っていて何度か来たことのある場所だった。

中々に立派な、だが少し古臭い洋館。

間桐桜、間桐椎名の家だった。もしや彼女達のどちらかがマスターなのか、もしくは彼女達の他の住人がマスターなのだろうか。

以前に間桐姉妹の親は既に亡くなっていると聞いたことがあり、更には間桐の祖父にはあったことがある。祖父がマスターであるのは正直勘弁願いたかった。あの爺さんは何だか関わりたくない。何と

なく感じた。あの爺さんは酷く危険だと……。酷くきな臭いのだ、あの老獺は。

「ではマスターの元へご案内致します」

そう言って連れてこられたのはこれまた何度か来たことのある一室だった。

ライダーが扉を開く。

すると、部屋の中からマスターであろう者の声が聞こえてきた。

「どうぞ」

どこか優雅で凛とした美しい声色。俺はこの声の主を知っている。付き合いこそ短いが、それなりに深い仲であると思う。

部屋に入る。

声の主は少女で、シンプルな、だが高級そうなソファアに腰を下ろしていた。

その少女はウェーブのかかった青い髪を軽く払うと、女性としてはずっとソファアから立ち上がると俺の前まで歩いてき、俺の顔を少しいたずらっぽい笑みで覗き込んできた。

「この部屋に招いたのは久しぶりかしらね？」

「ライダーのマスター、間桐椎名。魔術行使の叶わぬ魔術師よ」

「やっぱりお前か・・・椎名」

「はっ！」

「ほう？」

美しき月の下、群青の侍と金色の髪を持つ騎士が踊る。

セイバーと剣を合わせている間、セイバーは気付いていなかったが、アサシンは退が来ていることに気づいていた。彼が林に潜伏していたサーヴァントに連れ去られた事も。内心、アサシンは気が気ではなかった。

理由は単純明快。

気の雰囲気で分かった。有無を言わず連れ去られたのだと。

つまりは脅されたか力づくでかどちらかだとアサシンは内心で結論付ける。

だが今セイバーと剣を交えている上に彼女は柳洞寺の山門に縛られている。

彼女に出来ることは友である退の無事を祈ることと、再び友に相見えるためにこの場でどうあってもセイバーを退けることだった。

だからこそアサシンは出すことを決める。
ランサーとの戦いでは出すことの叶わなかった己が秘剣を。

「セイバー」

「・・・？」

突然のアサシンの言葉にセイバーは訝しげな表情になる。

アサシンの顔に先程までの余裕は多少なりとも欠落しているのを見て取れた。

アサシンはそれに気付かず続ける。

「これで、最後としようではないか」

アサシンは静かに構えた。

秘剣の構えを。

しかし、セイバーはそれに応じず剣を下ろす。

アサシンはセイバーの行動が理解できなかった。

それはそうだろう。最優のサーヴァントセイバーともあろうものが敵前で剣を引いたのだから。

セイバーはアサシンの疑問が見て取れたのだろう。

至って真剣な表情で話す。

「貴方からは先程までの余裕が感じられません。一体どうしたというのですか」

「・・・」

見抜かれているとは思わなかった。常人には気づくことなど出来ないアサシンのポーカーフェイスも、セイバーの前では無力だった。

「私は最初、この柳洞寺を攻略するために赴きました。だが今は少し違う。貴方は私の知る限り最高峰の剣の使い手だ。なればこそ貴方と決着を付けるのならば全力でやりたい。」

「セイバー……」

「今日の所は私が引きます。次相見えるときは全力で剣を交えたい……では」

セイバーはそう言って柳洞寺を去っていった。

アサシンは追わない。彼女は山門を守るこのみが仕事でそれ以外は対象外。

それもあるがもつと別に理由があつた。

まさかセイバーが引いてくれるとは思わなかったのだ。

アサシンもセイバー同様に彼女とは全力で果し合い、決着をつけたい。

このような余裕のない精神状態で、勝つたとしても負けたとしても未練が残るだろう。

だが退が連れ去られ心配だったのだから仕方ない。

そう思った。だがセイバーはそんなアサシンの心情を察し、身を引いた。

あの最優のサーヴァントが、だ。

「ふっ」

まさか敵に気を使われるとは、とアサシンは自嘲気味に嗤った。だが、セイバーには感謝している。もしこんな状態で決着が付いていたら、きっと後悔していた。

「・・・かたじけない」

去っていったセイバーに、アサシンは軽く頭を下げた。

第十六話（後書き）

申し訳ない、アルティメットマーヴルVSカプコン3をやっていたり色々してたらこんなに日が経っていました。

というわけで間桐に赴く退と人一倍心配性なアサシンさんと空気読めたセイバーさんのお話でした。

アサシンさんはこの時代に友達が退しかない上に心配性、武人な彼女といえど平常通りとはいかなかったのでしょうか。

こんなアサシンさんが気に入らなかった方は許してください。今作品のアサシン、セイバー、主人公はこんな感じですので。

ではまたお会いしましょう。

第十七話（前書き）

ハム子かわいいよハム子

アイギスかわいいよアイギス

あー・・・ペルソナ3の小説書いてえな・・・無論女体化系で
俺と言えば女体化・・・な気がする

第十七話

「それで椎名・・・何故俺をここに招いた？」

「私としては退、あなたをここに呼ぶことがなければいいと思っていた」

椎名はいつもの落ち着きはどこへやら、悲しげに目を伏せる。
何となく検討が付いた。

椎名は俺を利用するためではなく、俺を人知れず守ろうとしてくれていたのだろう。

マスターということは彼女は魔術師側の人間で、俺は魔術師側ではない一般人で。

魔術師というものは神秘を秘匿するもの。一般人の目に付いたら始末するのがセオリーだと遠坂さんが言っていた。
ならば逆に守ろうとする椎名は珍しいタイプなのだろう。

「いや、あなただから私は守るのよ。私にとってとても大切なあなただから」

「・・・心を読まれた気がするのは気のせいかな？」

「いえ衛宮退様、気のせいではありません」

俺の考えをライダーが肯定する。

気のせいではない、ということは椎名には読心術の心得があるのだろうか？

まさかそんな代物をこの娘が身に付けてるとは思わなんだ。

「とは言っても深くはわからないわ、何となく、感覚的に分かるだけよ。大雑把にね」

「成程な・・・決して万能な代物でもないわけだ。で、だ・・・。」

俺は話を本筋に戻す。

何故俺はここに連れてこられたのか、だ。
正直見当がつかない。

「それはあなたの行方を常に把握していたいから、そうすれば何かあれば直ぐに駆けつけられるでしょう？常に見られている感じがして多少不快感はあるでしょうけど」

「成程、確かに俺では万が一サーヴァントに遭遇したときに多少は戦えても長くは持たないだろうから・・・直ぐに助けが来てくれるというのは正直有難い。・・・だがそれは俺にしかメリットがない気がするが、それについては？」

「確かにそうね・・・それについては追追考えるわ。大丈夫、無理難題は押し付けけないから」

俺はこの案を呑むことにした。

俺はまだまだ弱い、聖杯戦争なんて危険な事が起こっているこの街で、更にはその参加者の何人かに目を付けられているとなれば生き抜ける自信がない。

いや、恐らく生き抜けない。先刻まで戦っていたライダー、それにランサー、バーサーカー。

どういつもこいつもとんでもない身体能力を持っている上に技術も高

い。

対して俺には片腕がない。さすがに火力不足は否めないし、何とか喰らい付けるのは速さ位だ。

だがライダーにせよランサーにせよバーサーカーにせよ俺に匹敵するスピードがある。スピードで負けてしまえば俺が太刀打ちできるモノはない。精々尻尾巻いて逃げるくらいだろう。

逃げるにせよ予め準備がなければそれも辛いだろうが。

「その案、呑む。生き残る為だ・・・」

「分かってくれて嬉しいわ。貴方には・・・ただ生きていて欲しいから」

「アサシン、貴方セイバーを取り逃したようね。全く・・・役に立たない門番ね」

アサシンは声ができる方へと目を向ける。

そこには紫色の怪しげなローブを纏った女、キャスターのサーヴァントがいた。

キャスターこそが柳洞寺の山門を依代としてアサシンを召喚した張本人、所謂マスターに当たる存在だ。

キャスターはセイバーを取り逃がしたアサシンを憎々しげに睨みつ

け、役立たずと罵る。

そんなキャスターにアサシンは涼しげに返答する。

「いやはや手厳しいな女狐。いやなに・・・私の役目は山門を守る
ことのみでな。山門を通過しないのであれば私は追わぬよ」

「・・・ふん、でもまあセイバーの戦闘を見ることが出来たのは大
きな収穫だったわ。流石は最優のサーヴァントセイバー・・・とん
でもない能力の持ち主のようね」

だが次の瞬間ローブの奥のキャスターの眼はキラリと光る。

アサシンは何事だろうか、まあどうせくだらないことだろうと黙す。

「何より途轍もなく可愛らしかったわね！きつとメイド服やらフリ
リのワンピースがよく似合うんでしょねえ！・・・嗚呼、着せ
替えしたいわ。あれやこれを着せて・・・うふふふふふふふ
ふ」

突然ブツブツ呟き始めたキャスターを後目にアサシンは空を見上げ
る。

どこまでも深く暗い空。

そこには、先刻の戦いの時と変わらない美しい月が、群青の女侍と
変態っぽい紫魔女を優しく照らしていた。

セイバーが衛宮邸に戻ると、そこには私怒っていますと顔に書いてある彼女のマスター——白——が玄関で腕を組んで仁王立ちしていた。

「どこに行ってたの？」

「ま、ますたー……えっと、その……柳洞寺に行っていました・・・」

白はセイバーの返答を聞くとニコリと嗤った。
目は笑っていないが。

白は一言だけ、一言だけ口にした。

「朝ごはん抜き」

「・・・!? はい・・・」

セイバーは血涙を流しながらただ頷いた・・・。

第十七話（後書き）

最近スクライドを見直しました。

やっぱりカズマがっこいー・・・君嶋もクーガーもがっこいー・・・。
だが劉鳳、テメーはだめだ。

番外編「ペルソナ3 なんとなく書いてみた」プロローグとか言ってみたり（前書

なんとなくさ、なんとなく

番外編「ペルソナ3なんとなく書いてみた」プロローグとか言ってみたり

俺、衛宮退は電車に乗っていた。

いつの間にか、理由は定かではないが乗っていた。
ポーンと機内放送の音になる。

「次は〱巖戸台、巖戸台――」

巖戸台、聞いたことのない地名だった。

いや、知らないだけで実際存在していたのかもしれないが、そんなことはどうでもいい。

何故俺はそんな所行きの電車に乗っているんだ。

訳が分からない。どうなっている？

俺はこうなった理由は無いものかと思考を巡らせる。

『退！とうとう第二魔法に到達したかもしれないわ！実験に付き合
ってちょうだい！』

『・・・はあ？』

そつ、俺は結局凜に押し切られて実験に付き合わされたんだ。

そして、何かされた直後意識を失って・・・。

現状に至る・・・と。

成程、つまりこれはそういうことかと俺は納得する。

「凜のいつものうっかりか・・・全くあれはもはや呪いだな」

俺は思わず深い溜息を吐いた。

「あの、そんなに深く溜息を吐いてどうしたんですか・・・？」

その時、あまりに深い溜息だったのかやや心配そうな声色で声を掛けられた。

声の主は隣に座っていた少女だった。黒い学生服だろうか？を身に纏い、茶色の髪を何個かのピンで止めた赤い瞳を持つ少女だ。いけないな、水知らずの他人に心配をかけてしまうとは・・・。

「すまない、友人のせいで少々面倒な目にあってしまったね。つい溜息なぞ吐いてしまった。心配してくれてありがとう」

「いえ、大丈夫なら良かったです。あ、私、主人ぬしびと 公子きみこって言います。貴方は？」

「俺は衛宮退。そろそろ三十路のただのおっさんだよ」

言っておくが無職ではない。

ちゃんと死徒討伐とか要人の護衛などやっている。

稀に式や美樹ちゃんなんかも手伝ってくれる。

式は護衛で、美樹ちゃんは搜索系の仕事で一役買ってくれている。

「衛宮さん、ですか。よろしく願いします！年齢よりずっとお若いんですね」

「宜しく願います。見たところ学生だが礼儀正しいな。そういう娘は俺の周りには少なくてな。何だか新鮮だよ」

そう、白は家族だからいいとして、椎名・綾子ちゃん・式・ランサーとまだまだいるが割りと大人しめの娘というのは周りにいなかった。

明朗快活、猪突猛進なヤツが多かったため、こういう娘は新鮮だ。それに若いって・・・嬉しいことを言ってくれる。

刹那、またポーンと音が鳴る。

「あ、着きましたね。じゃあ私巖戸台で降りますんで・・・また会えるといいですね！」

そういつて主人さんは降りていった。

とりあえず俺も巖戸台で降りてみることにしよう。

無論券など持っている訳がないので、券を紛失したと偽って券を購入する羽目になった。

そして即改札で使うという・・・何だか虚しかった。

改札口に券を入れ、とりあえず駅から出ようとした刹那。

音が消えた。

電気の付いていたものも何もかも、見てみるとどうやら俺の携帯電話や腕時計も止まっているようだった。故障かとも思ったがそれにしては出来すぎている。

何が起こっているんだ？

とにかく事態を把握しようと駅を出ると、そこには・・・まるで棺桶のようなオブジェがいくつも置かれていた。

それに何かの気配がする。

殺気も感じる。それも複数、だが雰囲気的にはそう強くない。

だが油断は禁物だ。俺は何故か手にしていた刀を抜き、辺りを警戒する。

そして、殺気が濃厚なものとなる。

「・・・来るか！」

正面に数体の何かが躍り出てくる。

それは・・・。

黒い、形容し難い造形の化け物だった。

番外編「ペルソナ3なんとなく書いてみた」プロローグとか言ってみたり（後書

所謂筆休めでござる

第十八話（前書き）

ふう、久々にこんなに更新したな

第十八話

椎名は俺の了解の意を汲むと、ライダーに何かを持ってくるよう命じた。

ライダーはただ頷き消え、次の瞬間再び姿を現すと手に何かを持っていた。

「ありがとうライダー、下がっていいわよ」

「了解しました」

椎名がそうライダーを労うと、ライダーは了解し霊体化した。

椎名が持っているモノは指輪だった。見た目は何の変哲も無い銀製の指輪だ。

これは一体何なのだろうかと考えていると、察していたのか椎名が答えてくれた。

「これは『道標の指輪』という何とも安直なネーミングの指輪でね、これを付けた者の詳細な位置や大まかな状態等を知らせてくれるマジックアイテムよ。これを退に預けるわ」

「成程な、何か俺に魔術を掛けたりとかそういうことではないのか」

「私には魔術は使えないのだから当然でしょう。呪いとかなら使えるかもしれないけどね？」

そう言つて椎名はニヤリといたずらっぽく笑った。

その後直ぐにその表情を崩し、優しげな笑みを浮かべて言った。

「さあ、そろそろ帰ったほうがいいわ。もう深夜を回っているし、万が一白に貴方がまだ帰っていないことに気付かれたら大目玉よ?」

俺は椎名にそう言われて苦笑い。

他の皆はどうだか知らないが、俺は白が幾ら起こったとしても全く怖くなかった。

むしろ俺を見上げながら必死にお説教しているあの娘は実に愛らしい。

兄としてはどちらかというと逆効果だ。口には出さないが。

だが涙目ながら怒られていると心配してくれていたのだとわかり罪悪感を感じてしまうのは事実だ。

愛されているなと思えるのと同時に申し訳なさが俺を苛む。

そうならないように出来るだけ早く帰宅したほうがいいだろう。手遅れかもしれないが。

「ああ、そうするよ。今日はありがとう椎名」

「ええ、指輪は嵌めなくても効果はあるからポケットに入れておくなりなんなりして頂戴」

「ああ」

俺は改めて椎名に一言礼を言うと、間桐邸を後にした。

自宅に着くと、皆寝静まっていたのが確認出来た。

電気も消えているし、何者かが活動しているような気配もない。
・・・いや、一人だけいた。

「周辺の警戒ご苦労様、アーチャー」

そう、衛宮邸の屋根の上で周辺の警備にあたっているアーチャーだ。
アーチャーは俺に声を掛けられると、一瞬緩んだ顔を即引き締め、
屋根から降りてきた。

「退か、こんな時間に帰宅とは・・・むっ？」

「どうした？」

アーチャーは何か言いかけて止まった。

数秒程訝しげに俺を見つめると、次の瞬間には何やら不機嫌な表情
へと変わっていた。

そしてアーチャーは不満げに口を開く。

「成程、他の女に会いに行っていたのだな・・・それも、そう、何
やら敵の感じがする。聖杯戦争云々ではなく女として・・・だ」

「はぁ・・・」

俺はアーチャーの発言の訳が分からず生返事をする。

しかしアーチャーは何やら考え込んだ後、途端に笑顔になると自信
満々と言わんばかりにうなづく。

「いや、しかし私は一番有利なのだ。現在どころか、過去、未来の
退も少なからず知っている。その上今の私ならば兄妹としての繋が
りはない・・・合法、合法なのだ。くつくつくく・・・」

暗がりの中で所々がハネた銀髪ロングの浅黒い肌の赤い外装女が怪しげに笑っていると実に不気味だ。
俺はアーチャーの思考がどこかへ飛んでしまったようなので、苦笑いしつつ家の中へと入ると、出来るだけ静かに風呂へ入り、自室へ戻って寝た。

「ランサー、柳洞寺への偵察はどうだった」

ランサーに声を掛けたのは、一見大人しそうな少女？だ。

女性としては長身で、ウェーブのかかった黒い髪を腰辺りまで伸ばしている高校生位の少女？だ。

彼女の名は、言峰^{ことみね} 綺麗^{きれい}といった。

ランサーに問いかける綺麗は美しいがどこか怪しげな雰囲気醸し出していた。

「ああ、山門にアサシンが番していやがったぜ。戦ったが大した腕だ。一筋縄ではいかねえだろうな」

「ふむ、聞いた話では柳洞寺を拠点としたのはキャスターだった筈だがな。もしかや両マスターは同盟を結んでいるのか？」

「真偽は定かじゃないが、そうかもしれない」

綺麗はふむ、と顎に手を当てるとしばし思考を巡らせた。

そして結論を出す。

「とにかく、今は様子見だ。キャスター共には好きにさせておけ」

「ちっ……！いい加減俺は偵察なんてモノじゃなく死合がしたいんだが……マスターの命令だ、従うさ」

「そうするといい。それで、他には何かあるか？」

「ああ、そういやぁ前に報告した一般人の兄ちゃんがアサシンといたぜ。どうやらマスターではないようだがな。ったく……アイツとも殺り合いたかったんだがな」

ランサーは実に不満そうに溜息を吐いた。

綺麗はランサーがそうまで言うほどの手練が表の世界にいるとは、と内心で感心した。

サーヴァントと戦える時点で少なくとも一般人ではないだろうとは思ったが。

「その兄ちゃんとはバーサーカーの一撃を受け止めた片腕の男の事か？」

「ああ、そいつだそいつ……ああ、本当に残念だぜ」

「ふむ、その男について何か情報は手に入ったのかランサー？」

「そうだな……アサシンが退って呼んでた位だな」

「……！？」

綺麗は名を聞いて驚く。

なぜならばその名が自身の知人にいたからだ。

その知人の名は・・・衛宮退。泰山麻婆豆腐好きの同志であり、友
と言える人物の名であった。

第十八話（後書き）

筆休めにまた番外のペルソナ3書いてみようかな
どうしようかな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1900x/>

Fateなんとなく書いてみた

2011年11月30日15時51分発行